

周瘦鵑「百合魔」の底本……………樽本照雄 1  
 蘆花『外交奇譚』の漢訳(上)……………沢本香子 9  
 『空谷佳人』翻譯底本考辯……………馬 文偉52  
 清末小説から8、55

★『清末民初小説目録 第15版』を公開しました。最新の研究成果を吸収するように努めて総約8,600頁です。電字版ですから作家と作品の検索ができます。研究のお役にたてばさいわ

清末小説研究会 日本〒520-0801 滋賀県大津市におの浜2-2-5 212号 樽本照雄方

周瘦鵑「百合魔」の底本

周瘦鵑「百合魔」の底本

樽本照雄

はじめに

周瘦鵑「百合魔」(『小説月報』第2年第3期 1911.4.23)がある。その原作に関連して渡辺浩司が次のように指摘した。「蘆花訳述(徳富蘆花)『外交奇譚』(民友社1898.10.13)中の「百合の花」(もとは『国民新聞』1898.1.16-23掲載)更にその原作は、ALLEN UPWARD “A SCANDAL AT THE ELYSÉE” (“SECRETS

OF THE COURTS OF EUROPE”J. W. ARROWSMITH, 1897?)」(樽目録参照)

上にもとづき翻訳経過を図式化すれば、アレン・アップワード原作→蘆花日訳→周瘦鵑の順である。この説明は基本的に正しい。

本稿はそれにあることを補足する。すなわち周瘦鵑の前に漢訳「百合花」1種が存在している事実である。

漢訳の経過

漢訳にいたるまでの公開順序を復習する。

最初にアップワード原作の「エリゼ宮の醜聞 [A SCANDAL AT THE ELYSÉE]」(『ヨーロッパ朝廷の内幕話 [SECRETS OF THE COURTS OF EUROPE: THE CONFIDENCES OF AN EX-AMBASSADOR]』BRISTOL: J. W. ARROWSMITH, 1897。初出は“PEARSON'S MAGAZINE” 1896.2)がある。エリゼ宮は大統領府だ。当時の住人大統領マクマオン将軍にまつわる醜聞を書き綴る。

それを蘆花が日訳して「百合の花」(『外交

奇譚』1898所収)にした。題名の由来は物語がユリ花を中心に展開するからだ。つづいて蘆花を底本にした佚名漢訳「百合花」(『新民叢報』1902)ができた。さらに佚名を「闕名」におき直した同題同内容の「百合花」が『説部腋』(1905)に再録される(以下闕名。引用は該作による)。漢訳題名もユリ花を使用するから蘆花との結びつきがわかりやすい。漢訳者については不詳のままである。

関連してひとこと加える。『新民叢報』に「中国某訳」としか示さなかった漢訳がある。『説部腋』に再録された際に披髮生と明記した。それにより中国某が羅普の筆名であることが判明したのだ。ただし「百合花」については佚名だから闕名であることに変わりはない。

外国作品を日本語経由で漢訳した。清末民初時期では普通に見られる。ここまでは問題はない。次に周瘦鵬が出てくると奇妙なことになる。

### 周瘦鵬のばあい

本稿で取り上げる周瘦鵬の作品は前出のとおり泣紅「(政治小説)百合魔(一名麦瑪韓辞職記)」(『小説月報』1911)だ。題名の「百合魔」は日訳で「ユリの悪魔」とする。のちに

を底本にしたらどう。この推測が自然と出てくる。しかし周瘦鵬が原題の「エリゼ宮」をなぜ漢訳題名にしなかったのか。これが疑問のひとつだ(後述)。さらに蘆花日訳を出して直結させると具合が悪い理由がある。周瘦鵬が日本語から漢訳したような印象を受けるからだ。周瘦鵬が日本語を理解したという記録はもともと存在しない。

周瘦鵬を闕名と表示した作品がある。周瘦鵬「磨坊主人」(『小説月報』1912)が『愛国英雄小史』(1917)に収録されて闕名だ。ならば闕名「百合花」は周瘦鵬「百合魔」と同文なのかと疑問をいづく人がいるかもしれない。しかし両作品は題名は似ているが本文が異なる。このばあいは「闕名=周瘦鵬」が成立しない。

しかしまったく無関係ではないところが複雑だ。これが本稿の主題となる。言い換えれば周瘦鵬は何を底本に使用したのか。この問題ははまだ解決されていない。

### アップワード原作、蘆花日訳と闕名漢訳

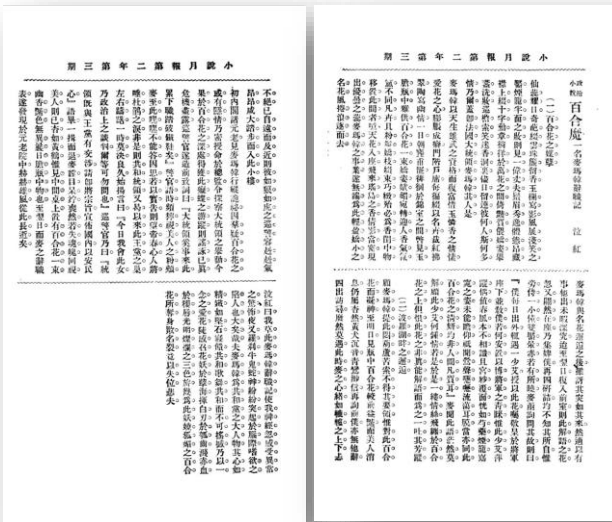
アップワード原作から生まれた本作について蘆花日訳および漢訳を含めてその内容を簡単に説明する。

大使は聞き手を相手にビリヤード(撞球)をしながらフランス大統領マクマオン將軍(以下、將軍)が突然辞職するにいたった内幕を話す。

蘆花はビリヤード場面についてはすべて削除した。大使と聞き手の会話も同様に省略する。同じことはすでに日訳「王の紛失」で見られる。

將軍がアイルランド系の出自であること、その経歴についても「前言」あつかいにして後ろの部分から前に移動させてもいる。原文どおりに翻訳していない。翻案であるという理由だ。

原作のままではなく蘆花が独自に要約した部分について説明する。マクマオン大統領辞職の真相を大使が語りはじめる個所だ。原文をまず引用する。



後記

首頁

転載をくり返した(こちらも樽目録を参照)。

周瘦鵬は英語ができたからアップワード原作

【原文】“There was the MacMahon affair, which was not without interest, and to which, moreover, those miserable journals never really obtained a clue.” p.193

「マクマオン事件があったが、この事件には関心がなかったわけではなかったし、しかもあの惨めな新聞はその手がかりを得ることができなかつたからね」

これは大使の発言だ。だからカッコを使用している。聞き手の青年がこれに反応して次のように記述する。物語は聞き書きという設定になっているから地の文章である。

【原文】I caught eagerly at this name of the great Marshal, whose sudden and unexplained resignation of the French Presidency had formed one of the most startling episodes of modern history. p.193

私はこの偉大な元帥の名前に強く惹かれた。彼は突然、説明のないままフランス大統領職を辞任し現代史の最も驚くべきエピソードのひとつとなったからだ。

ふたつの部分を合わせれば、将軍が説明もなく大統領を辞任して新聞も真相を突き止めることができなかつた、という意味になる。

欧米の読者ならば以上の説明だけでおおよその道筋を読み取ることができるのかもしれない。しかし蘆花は日本の読者にはもう少し説明をする必要があると考えた(傍線、ルビ省略。以下同じ)。

【蘆花】「早や二十年の昔となりしが、仏国大統領麻克馬奔(マクマホン)将軍一朝突然辞職して世を驚かしたることあり。当時其原因として各国の新聞に載せし所にては、何か共和政府の首領たる身にあるまじき陰謀ありし様にて、世間の疑惑は一ト方

ならざりき。65頁

蘆花が追加したのは「二十年の昔」、またマクマオン将軍が共和政府の大統領を辞任した理由には「陰謀」がからんでいるという説明だ。読者は陰謀とは何かと興味を抱くだろう。

ところが蘆花は自分でつけ加えた陰謀でありながらそのすぐ後で否定する。すなわち「然るに此頃に到て誰言ふとなく伝ふる所によれば、偕(さて)も意外、麻将軍を倒したるものは陰謀の露頭ならで、香りも深き一朵の百合花なりとは」(65-66頁)。

将軍の辞任はユリ花が原因だった。この謎めいた説明が日本語訳題名「百合の花」につながる。蘆花は原文題名「エリゼ宮の醜聞」を無視して新たにそう命名した。

周瘦鵬作品の題名に注目する人がいるのではなからうか。英文原作にもとづいた漢訳であればひとつの例として「愛麗舍宮之醜聞」も考えられる。そうはしていない。また内容からいえば『小説月報』掲載時とそれ以降に示した別題名「マクマホン辞職記[麦瑪韓辞職記]」を正式題名にする方が適切だったと感じる。周瘦鵬はなぜ「百合魔」にしたのか。原題に「百合」はないではないか。そこに謎を解く手がかりのひとつがひそんでいる。

漢訳2種を見る。

【闕名】千八百七十九年。法国大統領麦馬韓。一朝辞職而去。当日各報伝聞。皆謂別有深意存乎其間。故敝屣万乘。毫無顧惜。而不知有大謬不然者。乃誤於一枝百合花耳。91頁

1879年フランス大統領マクマホンはある日辞職してしまった。当時新聞は、そこには別に深い意味があったから首領という地位を破れ靴のようにまったく重んじなかつたのだと報じた。しかしそれが大間違いであったことを知らなかつた。すなわちユリ

の花1輪によって失敗したのである。

【周瘦鵬】なし

闕名の上記説明は「前言」という形にしている。1879年という数字は蘆花の「前言」に「千八百七十三年より千八百七十九年まで大統領たりし者はマクマホン将軍とす」(64頁)とある個所から引いてきた。それと蘆花の冒頭部分を結合させて闕名独自の「前言」にした。蘆花の「隠謀」は「別に深い意味があった[別有深意]」に言い換えた。蘆花の日記をよく読みこなして作文しているといえる。

周瘦鵬とはといえば関連個所を無視して独自の説明をはじめめる。「新鮮な花は日に照り映え、珍しい花は雲に彩を添える。玉すだれには香が残り、玉蘭に姿が映る[仙蕊耀日。奇葩綴雲。珠簾留香。玉欄写影]」(1頁上)などと文章を飾った。漢語題名「ユリの悪魔[百合魔]」にちなんで花にまつわる語句を集める。襟に十字勲章をつけて花を愛する偉丈夫こそフランス大統領マクマホン(麦瑪韓)その人である、と記述するのだ。原作の影も形もない。ここは闕名の漢訳とも無関係である。周瘦鵬の創作だ。

マクマオン将軍(王党派)はナポレオン3世のもとで立身し、奈翁没後には共和政府の第3代大統領に選出された。

王党派の象徴はユリ花であり共和派のそれは三色旗(トリコロール)である。これが物語の核心だ。共和派に対抗して王政復古を望んでいた王党派のシャンボール伯アンリ5世の徽章こそがユリにほかならない。将軍がもともと王党派であったためシャンボール伯が王位につくのではないかという火種がくすぶっていた。

大統領マクマオン将軍(当時71歳)のもとに謎の美女からユリの花束が贈られた。これが物語の発端である。将軍はそれに興味を持った。指示通りにユリ花を身に飾って美女と密会を重ねる。

謎のユリ姫はアンリ5世の王女であった。父

を王位につけるために将軍の助力を望んだ。一方の将軍はユリ姫に老いらくの恋情を抱いた。ふたりの認識は基本的にズレている。それを主題にしたのがこの作品だ。

内閣は将軍が王党派の女性と密会している事実をつかんだ。その目的は政治的か、それとも私的なものか。確認する必要が生じた。

【原作】The sole question which the Ministry had to determine, before they proceeded to decisive measures, was whether this affair was in fact a political conspiracy or a mere intrigue. p.217

内閣が決定的な対策を講じる前に判断しなければならない唯一の問題は、この事件が政治的陰謀なのか、それとも単なる密通なのかということだった。

【蘆花】内閣にては、最後の手段を取る前に、先づ此事は政治的陰謀なりや、将た単に艶めかしき会合なりや、を確むることゝなりぬ。89頁

蘆花はこの個所を原作のままに翻訳した。将軍が王党派と共謀して政治的陰謀にかかわっていれば大問題になる。しかし私的な色事であれば大目に見られるだろう。将軍はこの分かれ目に立たされた。

闕名はこの部分を省略した(100頁)。ただし終盤において独自に次を加筆している。将軍とユリ姫のふたりが会談しているホテルの現場に警視總監が踏み込んだ場面の発言である。

【闕名】又目麗人曰。此女子纖纖如不勝衣。亦未像有政治深謀者。100頁

麗人を見て言った。「この方は着物の重さにもたえられないくらいにか細く、政治的陰謀にかかわっているようにも見えませんな」

蘆花日訳には存在しない。闕名独自の説明だ。警視總監が実際に発言したのは次のとおり。原作は「大統領閣下、この女性は共和国に対して陰謀を企てていると思われます。それをお伝えするのが私の義務です [‘It’s my duty to inform you, M. le President, that we believe this lady to be conspiring against the Republic.’]」(p.218)だ。それを蘆花は「大統領閣下、念の為め申上候、此婦人は共和政府転覆の陰謀をなし居る人に候」(89頁)とした。闕名は蘆花のこの部分を書き換えて上文を作文した。

さらに闕名の「2日前に總監は内閣の秘密命令を受けて大統領の動静を調査していた[先是兩日前。總監密受内閣命。査探大統領動静]」(100頁)がある。周瘦鵬はそれらを組み合わせて推測をまじえて書いたのが以下の文章だ。

【周瘦鵬】初内閣諸元老。見麦瑪韓行縦詭秘。因羣疑百合花之或有隱情。乃密授命於總監。令探察大統領之挙動。7頁上

はじめ内閣の諸元老はマクマホンの秘密行動を知って、ユリ姫とのあいだに隠し事があるかもしれないと疑った。そこで秘密裏に總監に命じて大統領の挙動を探らせた。

前半部は闕名にはない個所である。しかし結果として原作および蘆花の記述に近づいているのも不思議なことだ。偶然であろうが創造能力豊かな周瘦鵬だからこそなしたものだと思える。

周瘦鵬は闕名「百合花」を底本にしている

アップワード原作にもとづき蘆花日訳がある。蘆花を漢訳したのが闕名だ。ここまでは通常の経過だといえる。ところが周瘦鵬の文章は細部で英文原作とも蘆花日訳とも一致しない。だが闕名に酷似している個所がある。以下に説明する。

## ●表現の類似

将軍がユリ姫を知ることになるきっかけは朝食のテーブルに置かれたユリの花束だった。

【原作】……to perceive on his plate a tiny bouquet of lilies. p.195

……皿の上に小さなユリの花束が置かれているのに気づいた。

【蘆花】一束の百合花を皿に載せたり。66頁

ユリの花束は皿に載せられている。ところが闕名と周瘦鵬ではそれとは異なる。花瓶に挿されているのだ。

【闕名】見胆瓶中。挿有百合花一束。91頁

見れば細口胴丸の花瓶にユリの花束が挿されている。

【周瘦鵬】瞥見玉胆瓶中。雅供百合花一束。1頁上

ちらりと見ると玉製細口胴丸の花瓶にユリの花束が優雅に供されている。

闕名の「胆瓶[細口胴丸の花瓶]」に周瘦鵬は「玉[玉製]」を追加した。皿ではなく花瓶であるところが一致する。花瓶を出したのは闕名だ。周瘦鵬はそれを引き継いだ。原作は見えていないことがわかる。

次は呼称をめぐる将軍と美人の会話だ。

【原作】‘May I not have any other name by which to dream of you than “the lady of the lilies”?’/“If you like you may reproach me as “Mademoiselle Fleur de Lys.”’p.208

「あなたを夢見て呼ぶ「ユリ姫」以外にお名前はないのでしょうか?」/「もしお望みなら、私を「マドモアゼル・フルール・ド・リス」と非難してくださいませ」

**Fleur de Lys** は「ユリの花」。王党派の紋章として使用される。大文字を使用しているのは旅館の名称でもあるからだ。両方の意味を兼ねる。彼女は王党派の本陣であるその場所に住んでいる。それが明らかにされるのは物語の最後部分だ。以上を考慮して筆者が別訳をつけるとすれば「王党派姫」だ。**reproach** は非難すること。そう非難を込めて呼んでもかまわないという意味。

将軍は自分勝手に「ユリ姫」と称えているがほかに呼び名はないのかと問う。それに答えてフランス語で「ユリ姫」と呼んでもよいと美女はいう。英語原文ではそれで区別がつく。しかしそのまま日本語に翻訳すると意味不明だ。そこで蘆花は工夫をして美女自身が「謀叛姫」を提示したことに書き換えた。これならば日本の読者にも区別がつく。英文原作にはない蘆花独自の表現である。

【蘆花】「(略) 老生は百合花姫(さゆりひめ)とのみ御身を呼び参らしつるが、他に承はる可き御名は無之候ふか。／「おほゝゝゝ、閣下が嫌ひの謀叛姫とも呼び玉へかし」。77頁

興味深いのは闕名と周瘦鵬の文章だ。闕名が蘆花を漢訳しているのはわかっている。問題は周瘦鵬の方にある。

【闕名】与卿言数時。尚未知芳名。此後余乃名卿為百合花姫可乎。麗人笑答曰。是在将軍。即謂妾為妖狐姫。叛逆之姫。皆無不可。96頁

「あなたとは幾度かお話ししましたがまだお名前をうかがっておりませぬ。今後あなたを百合花姫と呼んでよろしいか」麗人は微笑んで答えた。「将軍のお考えどおりに。私を妖狐姫、叛逆姫とお呼びになってかまいませんわ」

【周瘦鵬】『与卿久語。未詢芳名。今後当呼卿為百合花姫。可乎』美人回頭微笑。答之曰『是在君意。妾不能強。即以妾為妖狐婦。叛逆之娘。皆無不可』3頁下

「あなたとは久しくお話ししましたがまだお名前をうかがっておりませぬ。今後あなたを百合花姫と呼んでよろしいか」美人は微笑んで答えた。「将軍のお考えどおりに。私が強制することはできません。私を妖狐婦、叛逆娘とお呼びになってもかまいませんわ」

蘆花にもとづく闕名の解釈に差異がある。これは問題にしない。より重要なのは闕名漢訳と周瘦鵬がほぼ同文であることだ。

もうひとつある。姫の呼称だ。蘆花の「謀叛姫」を闕名は「叛逆姫」とした。周瘦鵬も「叛逆娘」とほぼ同じ。さらに闕名は「妖狐姫」を追加し、周瘦鵬もそのまま「妖狐婦」を加えている。周瘦鵬が闕名漢訳にもとづいているのは明らかである。英文原作から離れている。

アップワード原作になく当然蘆花日記にもない部分がもう1例ある。だが闕名と周瘦鵬には存在している。この事実に注目する。

将軍がユリ姫との会合は政治的なものだと虚偽の証言をした後の描写だ。再びユリ花を出す。

【闕名】惟案間尚置有百合花一大束。其馨芳不減昔日耳。100頁

ただ机にはユリ花の大きな1束が置かれておりその芳香は以前と変わらなかった。

【周瘦鵬】惟見中間桌上。置有百合花一束。幽香艷色無異曩日胆瓶中物也。7頁上

ただ机の上にはユリ花の1束が置かれているのが見え、その香りよく美しいさまは以前に細口胴丸の花瓶にあったのと変わらなかった。

将軍がユリ姫と知り合うきっかけはユリ花だ。

原作と蘆花は皿のうえに花束を置いた。闕名と周瘦鵬はそれを細口胴丸の花瓶に挿した。物語の結末にユリの花束をもういちど置くことにより小説の出発点と最後を結びつけた。原作と蘆花の結末にその文章は存在しないことを指摘しておく。周瘦鵬は闕名漢訳にもとづいているのは明らかだ。

細かいことを指摘する。闕名漢訳と周瘦鵬には使用する固有名詞の一致が見られる。

### ●漢語単語の類似

マクマオン (MacMahon) 将軍を蘆花は「麻克馬奔将軍 (マクマホン)」とした。一般的漢訳の1例としては「麥克馬洪」がある。闕名は漢訳して「麦馬韓」だ。周瘦鵬は同音を当てて「麦瑪韓」とし漢字1字は書き換えた。

ブローニュの森 (the Bois de Boulogne) を蘆花は「ボア、デ、ブーロン池畔」とする。ブローニュの森には池があるからそこを示した。同じく漢訳の1例は「布洛涅森林」だ。闕名は蘆花の「ブーロン池畔」に「波羅湖畔」を当てた。周瘦鵬もそのままを取り入れて「波羅湖畔」だ。原作とは異なる。

以下にもう少し例をあげる。原作→蘆花→闕名→周瘦鵬の順だ (文末の百合魔固有名詞対照表を参照)。

エリゼー園 (the Elysée gardens) →エリゼー園→英黎惹花園→英黎石花園。日本語の「ゼー」に音訳漢字を当てて「惹」と「石」で分かれた。

シャンボール伯 (the Comte de Chambord) →シヤムボオル、又シヤムポール (伯) →蝦母波爾伯→蝦母伯。闕名は日本語表記の「シヤム」を音訳して「蝦母」だ。周瘦鵬は後半の「波爾」を省略した。

アンリ5世 (Henri V) →アンリー五世→阿力五世→阿力五世。闕名と周瘦鵬は同一。

フルール・ド・リス (Fleur de Lys) →フルール、デ、リス (旅館) →台爾利士 (之) 旅館

→台爾利士 (之) 旅館。これについてはすでに説明した。蘆花の「デ、リス」を闕名は漢訳して「台爾利士」である。周瘦鵬も同じ。

以上の固有名詞を見ればわずかに異なる個所はあるが基本的に闕名と周瘦鵬は同じとっていい。すなわち周瘦鵬は闕名の漢訳を継承した。そうでなければこれほど似た漢語にはならない。闕名がアップワード原作を知らなかったと同様に周瘦鵬も英文原作とは無関係である。

### 結 論

闕名と周瘦鵬の文章には表現が一致する個所が複数ある。また固有名詞の漢語がほぼ同一だ。闕名の使用した単語を周瘦鵬が省略することはある。しかしその逆はない。あくまでも闕名から周瘦鵬の作品が派生していることを示している。

周瘦鵬は闕名漢訳「百合花」(『新民叢報』あるいは『説部腋』所収)に依拠して書き換えて「百合魔」を作った。

一般に外国作品を翻訳するばあいの方は大別してふたつある。直訳することと原作にもとづいてはいるが書き換えるやり方だ。改作、翻案 (adapt、adaptation)、書き直し (リライト rewrite) などといっても同じ。清末民初では翻案する漢訳も多かった。だが五四以後には直訳がほぼ主流になった。

周瘦鵬「百合魔」のばあいは普通の翻訳とは異なる。もとをたどると外国作品であることは確かだ。しかし直接拠ったのはアップワード原作ではない。蘆花日記を漢訳した闕名「百合花」が底本であるところに特徴がある。

周瘦鵬は文末に「後記」を付け加えた。「私がこのマクマホン辞職記を起稿したのは……[我草此麦瑪韓辞職記……]」(7頁下)と述べている。あくまでも創作だと主張している。闕名漢訳に依拠して書き換えたという認識がなさそうだ。周瘦鵬の考えではこれも創作になるらしい。

周瘦鵑は儂更有情「情葬」(「恋愛奇談」『浙江潮』第8期 1903)にもとづいて脚本に改変したことがある。「(仏蘭西情劇)愛之花」(『小説月報』第2年第9-12期 1911-1912)という。「百合魔」も漢語作品を利用して書き換えたという点で同類である。

以上の経過をあらためて図式化する。アップワード原作→蘆花日訳→闕名漢訳→周瘦鵑書き

換え、となる。

なお、周瘦鵑と同様の先行例がある。次のとおり。選録「百合花」香港『広東日報』1906.1.4-8(梁冬麗、劉曉寧整理『近代嶺南報刊短篇小説初集』上 南京・鳳凰出版社2019.1所収)。この選録「百合花」は闕名漢訳「百合花」にもとづいて書き換えた作品だ。 罫

百合魔固有名詞対照表

ALLEN UPWARD	蘆花	闕名	周瘦鵑
MacMahon	麥克馬奔將軍/マクマホン	麦馬韓	麦瑪韓
Duke of Magenta	マゼンタ公爵	×	×
the Third Napoleon	奈破烈翁第三世	拿破崙三世	×
×	智衛爾/チエール	參亜	×
the gardens of the Elysée	宮邸の庭園	×	×
the Bois de Boulogne	ボア、デ、ブーロン池畔	波羅湖畔	波羅湖畔
the Elysée gardens	エリゼー園	英黎惹花園	英黎石花園
the Comte de Chambord	シヤムボオル伯/シヤムボール	蝦母波爾伯	蝦母伯
Henri V	アンリー五世	阿力五世	阿力五世
Austerlitz	アウストリツツ	×	×
Jena	ゼナ	遮拉	遮拉
×	ブルボン家	×	×
Fleur de Lys	フルール、デ、リス(旅館)	台爾利士之旅館	台爾利士之旅館
Grévy	グレ井ー	孤特依	×



『清末小説から』第152号

2024. 1. 1

蘆花「毒菓」の漢訳4種——喋血生、無欲羨斎主、  
 佚名1、佚名2 ……樽本照雄  
 抱一庵「少年使者」と喋血生「少年軍(二)」  
 ……荒井由美  
 抱一庵『ABC組合』と喋血生「少年軍(三)」  
 ……神田一三  
 喋血生の評論3篇 ……沢本郁馬  
 林訳《花因》、《想夫憐》、《眇郎喋血記得》原著  
 鑒定・補遺於林紓偽訳《名家点將》……古二徳

『清末小説から』第151号

2023. 10. 1

蘆花「少年軍」と喋血生「少年軍(一)」 ……樽本照雄  
 蘆花「王の紛失」の漢訳2種——羅普、喋血生  
 ……沢本香子  
 蘆花「巢鴨奇談」と喋血生「雌雄蜥」 ……荒井由美  
 蘆花「大陰謀」と喋血生「専制虎」 ……神田一三  
 喋血生「消露」について ……沢本郁馬



## 蘆花『外交奇譚』の漢訳(上)

沢本香子

### 1 はじめに

蘆花訳『外交奇譚』(1898)収録の各作品がどのように漢訳されたのかを検討する。本稿は沢本香子「蘆花「王の紛失」の漢訳2種——羅普、喋血生」(『清末小説から』第151号 2023.10.1)を引き継いでいる。原作については本文末の「参考文献」に掲げた中村忠行論文によった。漢訳文の発表状況は本稿の「漢訳外交奇譚」(原作順)に掲げる。その詳細は前出沢本論文所収「外交奇譚作品対照表」を見られたい。

蘆花該書の「例言」には次のようにある。

二、訳と云はんは如何ある可き。句を追ふて訳したる所あり。大意をとれる所あり。省ける所あり。改めたる所あり。増補したる所あり。姑らく訳述と云はむ。1頁

蘆花自らが直訳ではないと明記している。作品によってばらつきはある。彼がいう「訳述」とは別の表現をすれば日本語の「翻案」に当たる。説明する。訳述だけだと単に翻訳して述べるという意味に誤解されかねない。直訳ではなく加工している。だから翻案と言い換える必要がある。また「日本語の」と修飾するのは言うまでもなく漢語の意味とは違うからだ。

蘆花の翻案を漢訳はどのように反映しているか。省略、加筆、書き換えの実態を具体的に見ることが本稿の目的とする。

アレン・アップワード (ALLEN UPWARD) 原作『ヨーロッパ朝廷の内幕話 [SECRETS OF THE COURTS OF EUROPE: THE CONFIDENCES OF AN EX-AMBASSADOR]』

(1897)は全12篇を収録している。初出は『ピアスンズ・マガジン [PEARSON'S MAGAZINE]』(1896.1-12. hathi trust 所収)。1年間の連載分をまとめた単行本だ。その際、雑誌に掲げていた多数の挿絵は省略した。

大きな政治的転換の裏には個人的事情が絡んでいる。フランスの前大使がそれぞれの事件に積極的に関与し狂言回しの役割も果たす。その体験談をイギリス人の聞き手(年齢不詳。以下、青年)に話す。ふたりの会話で構成される。これがアップワード作品の基本構造だ。だから原作題名の「SECRETS」を翻訳してわざと「内幕話」にしている。一般的な「秘密」というよりも隠し事を思わせて具体的だと感じるからだ。

蘆花は原作12篇のすべてを翻訳した。ただしその際、原作の順序を変更している。それにもなって内容を独自に変更した個所がある。「王の紛失」においてすでに見た。

1902年から1905年にわたり複数の中国人が蘆花日訳を底本にして漢訳した。重複漢訳も1件ある。いくつかの雑誌にそれぞれ掲載される。

そのうち『外交報』の連載は最多の7篇だ。この訳者について問題がある。個別の漢訳作品について述べる前にそれを解決しておく。

### 2 『外交報』の漢訳者1——陳大康の記述

蘆花『外交奇譚』全12篇は重複を含んで喋血生、羅普、曼殊室主人、闕名、訳者不記らが漢訳した。ただし周瘦鵑の「百合魔」(『小説月報』1911所載)だけが蘆花とは直接の関係がない。蘆花にもとづいた闕名漢訳を使用して書き換えた(別稿参照)。

周瘦鵬以外の漢訳は『新民叢報』『新小説』『浙江潮』『外交報』の雑誌に公表された。前の3誌は日本で、また『外交報』は上海での刊行だ。

訳者が判明している作品もあるが不明のものもある。喋血生は筆名として知られている。しかし人物の詳細については不明のままだ。それらの漢訳を1本にまとめた、たとえば『外交小説』と題する単行本があってもいい。ところが見つからない。たぶん刊行されなかった。

『外交報』にはそのうちの7篇が発表された。訳者について記載がない。本稿は「不記」と書いてその漢訳者を指す。

ところがその中の漢訳「一条鞭」についてのみ漢訳者は秋士だという記述がある。同一題名の作品が『外交報』と『復報』の両誌に見えるのが理由だ。『外交報』は不記だが『復報』では秋士とする。そこから不記は秋士ではないか、という推測が出てくる。はたして正しいのか。ここからはじめよう。

同題の作品は以下の2篇だ。便宜的に数字を振る。

1 不記「(外交小説) 一条鞭」『外交報』甲辰28-29号(97-98期)光緒三十年十月二十五日—十一月初五日(1904.12.1-11)

2 秋士「(短篇小説) 一条鞭」『復報』第4期 中国開国紀元4604年7月15日(1906.9.3) 未見

題名の「一条鞭」が共通する。『外交報』に掲載されたあと『復報』にふたたび採録された。そう書いた研究者がいる。陳大康だ。

陳大康『中国近代小説編年』(2002)\*<sup>1</sup>で次のように説明する(下線筆者。以下同じ)。

(光緒三十年十月)二十五日(12月1日)《外交報》第九十七期開始連載《一条鞭》,至第九十八期畢,標“外交小説”,不題撰人,

後《復報》第四期刊載時署“秋士”。[編年129]

『外交報』の「一条鞭」は著者不記だ。上文の「不題撰人」がそれを意味する。この時点で陳大康は該作が漢訳であることを知らなかったようだ。後に同じ作品が『復報』に掲げられたと下線部に書いている。その時の署名は「秋士」だという。

陳大康は『外交報』(1904)の「一条鞭」は『復報』(1906)の「一条鞭」と同一作品だと明記した。そこから必然的に『外交報』の漢訳者不記は秋士ということになる。

陳大康が書いていることを筆者は尊重した。現在も雑誌『復報』を見るができない。それも理由のひとつだ。陳大康の叙述を長く信じていた。説明のとおりならば『外交報』にあるほかの漢訳についても訳者はすべて秋士である可能性が生じる。

このたび本稿を執筆するにあたり陳大康の記述をあらためて確認した。見直すと奇妙なことに気づく。陳大康自身が以前とは違うことを書いている。かつて示した記述を12年後に修正しているのだった。しかも記述変更については注記も弁解もしない。

後の著作は陳大康『中国近代小説編年史』(2014)\*<sup>2</sup>である。上記に該当する箇所を引用する。

(光緒三十年十月)同日(二十五日12月1日)上海《外交報》本年第二十八号(総第九十七期)開始連載《一条鞭》,至第九十八期,標“外交小説”,未署訳者名。[編年②772]

以前の記述では「不題撰人」としていたのを「未署訳者名」に変更した。翻訳であることを理解したらしい。しかし、より注目すべき箇所がある。前には存在した下線部の「後《復報》

第四期刊載時署“秋士”を削除している。それを含めて詳細を説明しないのが陳大康の特色のひとつだ。

陳大康が叙述変更した経緯を筆者が推測すれば以下のとおり。

『中国近代小説編年』(2002)は既発表の書目複数を参照して編纂した。必ずしも実物で確認してはなかったらしい。ゆえに『外交報』の「一条鞭」と『復報』の「一条鞭」を見て同題であることを理由に同一作品だと判断したのだろう。推測だろうから根拠はなかった。また「？」「推測」などの注記もしていない。同じ作品だと断言した結果だけが残された。

一方、後の『中国近代小説編年史』(2014)では編集方針を変更した。可能な限り実物で確認することに定めたという。陳大康は『復報』の「一条鞭」を見て『外交報』のものとは別物であることに気づいたのではないか。ゆえに以前の注釈を削除した。部分的な記述削除という行為そのものが別作品であることを証拠だてる。

実物で確かめたから秋士「一条鞭」にある「自注」を引用することができた。その一部を孫引きすれば次のとおり。

(光緒三十二年七月)同日(十五日9月3日)、上海《復報》第四期載《一条鞭》、標“短篇小説”，作者署“秋士”。(中略)其篇末有作者“自注”：“強權世界表面上如何文明，如何厚道，総究是不足信。(後略)。”[編年③ 1056]

考察するばあい「自注」があることもひとつの手がかりになる。「権力世界では表面がいかに礼儀正しく、いかに手厚くあたかろうとも結局は信用するに足りない。(後略)」この「自注」を見ると『外交報』の「一条鞭」とは別作品らしく思われる。『外交報』掲載の「一条鞭」にはもともと「自注」そのものがない。これも有力証拠だ。

関連して述べる。秋士という筆名を持つ人は複数存在する。高増はそのなかのひとりだ。左鵬軍\*3によるとおおよそは次のとおり。高増(1881-1943)は南社詩人。『覺民』を家族と創刊し、『醒獅』『復報』などに詩文、戯曲、小説、歌詞などを発表した。左鵬軍は高増について革命思想をもって戯曲を創作したとのべる。伝奇の数篇を内容紹介するが小説については言及しない。さらに高増が日本語を理解したかどうか不明だ。

以上を総合して考えると『外交報』の「一条鞭」と『復報』の同名作品は別物だと判定していいだろう。もとより漢訳と創作の違いがある。すなわち『外交報』の不記は秋士ではないという判定に落ち着く。

### 3 『外交報』の漢訳者2——中村忠行の記述

おなじく『外交報』の漢訳者について中村忠行が提示した意見を紹介する(注番号は省略)。本論末に示した参考文献に書かれている。

「瑠璃印」以下七篇は、湯友誠氏によって、新しく指摘されたものである。訳者は明示されておかないが、羅普と推測して誤りあるまい。蓋し、ここに訳出された七篇は、既訳の作品を注意深く省いてある。殊に、『新民叢報』に訳載された不記「百合花」の如きは、雑俎欄に「海外奇譚」として掲げられた二篇中の一編で、編輯の内幕に通じてゐた者でなければ、気附く筈はない。又、この時期に、羅普は康有為の密命を受けて上海に赴き、狄楚青・梁啓超と共に『時報』創辦のことを議し、やがて総主筆となつて、同地に居住することとなる。彼を措いては、他に考へられないからである。(後略) 32頁

中村の意見を箇条書きにしてまとめる。

1 『外交報』の漢訳者は羅普と推測して誤

りないだろう。

2 『外交報』の7篇は既訳の作品を省いている。

3 『新民叢報』掲載の不記「百合花」に気づいているのは編集内幕に通じていたからだ。

4 不記「百合花」を出して後の『外交報』の不記とは同一人物だと認識している。

誤解のないように説明する。3 4で中村がいう不記「百合花」は本稿では無名「百合花」と記述している。後の闕名「百合花」だ。

さて、中村が1で訳者を羅普と推測する理由は主として2の既訳と重複していないことだ。これは事実として正しい。しかしそれが訳者特定に関係するかどうかは別に考えなければならない。

3の『新民叢報』「海外奇譚」欄にあるもう1篇とは佚名「五月花(集録選報)」を指す。花つながりで「百合花」と一緒に掲げられた。「編輯の内幕に通じてみた者でなければ、気附く筈はない」を言い換えれば次のとおり。『新民叢報』に不記「百合花」が掲載されたことを承知する人はほとんどいなかった。それを知っているのは内部情報に詳しい人間だ。すでに漢

訳があることを知っていたから『外交報』では漢訳をしなかった。そこから訳者が羅普であることを導く。

中村の推測は情況証拠によって成立している。

#### 4 『外交報』の漢訳者3——筆者の見解

ここで再び提出するのは新民叢報社員編『説部腋』(新小説社1905.11.21)である。

「腋」とは狐の腋の下にある小さく白い毛皮のこと。珠玉漢訳短篇小説集を意味する。まさに『新民叢報』『新小説』掲載の漢訳作品を収録した小説集だ。これこそ新小説社の内部事情に詳しい社員の手になった刊行物である。

別掲の「漢訳外交奇譚」から蘆花日訳の翻訳順に整理しなおして引用する(喋血生漢訳を除く)。その漢訳者表記を中心に見ていく。

原作者アップワードについて羅普が「法国某」と誤記する。それ以外の漢訳者は何も言及していないことをまず指摘しておく。羅普が漢訳者であれば別作品についても「法国某」と記述しただろうと推測するからだ。それが無いという事実は訳者が羅普ではないことを示すだろう。

蘆花	『新民叢報』 1902.7.19-1903.6.24	→『説部腋』 1905.11.21
1 鉄公の退隱	「外交家之狼狽」法国某著、中国某訳	→「俾斯麦之狼狽」披髮生(羅普)訳
2 白糸	「(外交小説)白絲線記」○法国某著、披髮生(羅普)訳(『新小説』1903.8.7)	→「白絲線」○披髮生(羅普)訳
3 百合の花	「(海外奇譚)百合花」○無名	→「百合花」○闕名
4 冬宮の怪談	「俄皇宮中之人鬼」△曼殊室主人訳(『新小説』1902.12.14)	→「俄皇宮中之人鬼」△曼殊室主人訳
5 王の紛失	「竊皇案」法人某著、中国某訳	→「竊皇」披髮生(羅普)訳
<hr/>		
『外交報』 1904.3.31-1905.1.10		
6 鞭の痕	「一条鞭」○不記	
7 土京の一夜	「波斯剪」○不記	
8 法王殿の墓	「瑪瑙印」 不記	
9 一億万法	「埃及妃」○不記	
10 とりかへ子	「易児説」○不記	
11 三刺客	「三刺客」○不記	
12 大使夫人	「紅花球」○不記	

○印は蘆花の前言を漢訳していることを示す。△印はほぼ蘆花前言によっている。『外交報』掲載の「8 瑪瑙印」だけが前言を漢訳していない。連載の最初だからそのかわり独自の前言をつけた。

上を見れば蘆花日訳1から5までは雑誌掲載を経て『説部腋』に収録された。6から12までの漢訳はすべて『外交報』が初出だ。それらの漢訳題名は3字で統一している。『新民叢報』『新小説』を経て『外交報』連載となったのが時間的経過だ。公表時期がはっきり分かれている。

『新民叢報』に中国某訳で掲載した作品について『説部腋』ではその訳者を披髮生だと明記した。披髮生は羅普の筆名だ。中村が指摘しているあの羅普である。

筆者も中村が提出する『新民叢報』の「百合花」に注目する。その訳者が「無名」である個所が重要となる。いうまでもなく漢訳者名が「記載されていない」という意味だ。「中国某訳」ではない。中国某訳と無名では明らかに違う。「無名」が『説部腋』に収録されて「闕名」である。中国某は披髮生につながった。だが無名は闕名のままだ。闕名は披髮生(羅普)と関係がないという結論になる。

くり返す。初出では漢訳者を書き記していない。のちに内部事情に詳しい人物が編集して『説部腋』に該漢訳を収録した。訳者不記を引き継いで「闕名」と表示する。編集者は漢訳者が羅普ではないことを知っていた。

無名(闕名)「百合花」は蘆花前言を漢訳する。『外交報』掲載の不記諸作品も「瑪瑙印」1篇を除いてすべて前言を訳した。ここは共通するといっている。ところが羅普は蘆花前言を「白絲線」1篇(前言ではなく末尾に移動)を除いて漢訳していない。前言を扱う態度が明らかに異なる。

もうひとつ言う。既述のとおり蘆花日訳を底本に使用した羅普は原作者を「法国某著」と勘

違いしている。闕名と『外交報』不記の漢訳は原作者について記述していない。そこも違う。

掲載状況から考えて闕名は梁啓超、羅普らの仲間だと推測できる。

ひとつの可能性がある。「百合花」を漢訳した無名(=闕名)が残りの蘆花日訳7篇を翻訳した。すなわちはじめの「百合花」から約2年後に漢訳者名不記のまま『外交報』に連載する。訳者の名前がないところが共通する。少なくとも羅普ではない。

しかし問題はそれほど簡単ではない。「百合花」の無名(『説部腋』所収では闕名)と『外交報』の不記が同一人物である根拠はあるのか。

別人であるとする理由について述べる。作品2篇にひとりの人物シャンボール伯アンリ5世が出てくるが闕名と不記ではその漢訳が異なる。

ひとつは蘆花「百合の花」を漢訳した無名(闕名)「百合花」(『新民叢報』1902.7.19、『説部腋』所収)だ。もう1篇に蘆花「大使夫人」を漢訳した不記「紅花球」(『外交報』1904.10.23、11.21)がある。

作中人物のひとりについて両者(闕名と不記)の漢訳が一致しない。シャンボール(the Comte de Chambord)を蘆花は「シヤムボオ[一]ル」とし闕名は「蝦母波爾」だ。ところが不記「紅花球」では「亨[亨]保爾」を配して相違する。また別の表記アンリ5世(Henri V)を蘆花は「アンリー五世」とし闕名は「阿力五世」だ。しかし不記「紅花球」は「亨利五世」と異なる漢訳にした。これではヘンリー5世になる。

漢訳者が同一人物ならば固有名詞の漢訳は同じにするだろう。普通はそう思う。だから上の例についていえば別人説の証拠になる。

別の例をあげる。異なる漢訳者ならば登場人物の名前に別の漢字を割りふる。

徳富蘆花「大陰謀」(1900)を漢訳した喋血生と陳景韓のふたりがいる。登場人物のひとり「井ルソン夫人」について喋血生は「愛聖夫人」

(1903)とし陳景韓は「綺羅沙夫人」(1904)と違う訳語を当てた。喋血生と陳景韓は別人だと判断する根拠だ。

ところが漢訳者が同じであるにもかかわらず固有名詞を一本化しない例もある。松居松葉『虚無党奇談』(1904)を陳景韓が漢訳して複数の雑誌に掲載(1904-09)した。そこに登場するある伯爵夫人の名前はストラトノウスキーだ。陳景韓はそれを「水多羅」「奴密克」「沙脱」「花脱」「奴斯」「伊斯」と漢訳して統一していない。これほど多様な漢字を当てるのは理解がむづかしい。あるいは「普天、号公憤」とした人物を後に「蘇登、号季子」に変えてもいる。陳景韓は名前について漢訳の同一性を保つという細かな配慮をしなかった。

もうひとつ呉禱漢訳の例を示す。その『偵探小説 虚無党真相』(1907)に出てくる人名だ。

ロシア人「荒木あれ[ら]き」について最初は「夏拉幾」を当てた。ところが後に同一人物を「阿列塞夫」としている。同じくニコラス2世の師父である「慕辺殿ほ[ほ]へどの」には「濮黒」「霍愛」と別の漢訳を配した。

陳景韓のはひとりて自由で多彩な例だ。呉禱は2例にすぎない。底本となっている蘆花日記

にしてから固有名詞が一致していない例がある。ただしそれがあるからといって闕名と不記の相違1件も同様だとするには躊躇する。同一人物説をいうには根拠が不足するという意味だ。

「百合花」と「紅花球」の公表の時間を見れば約2年間の空白がある。だが時間的空白があるからといって漢訳方針が変わるものなのか。疑問に思う。

闕名と不記が同一人物であるとする可能性も視野に入れておく。しかし結局のところその確たる根拠を見いだすのがむづかしい。別人であれば漢訳人名の不一致も漢訳傾向の違いも問題ではなくなる。

もうひとつ追加する。『外交報』の不記漢訳は刊行時期を見れば『説部腋』に収録することが可能だった。不記漢訳が収録されていない事実は闕名と不記が別人であることを示しているかもしれない。

以上のとおり筆者は現在のところ闕名と『外交報』の不記は別人であると考えている。もともとから羅普ではない。かといって別の具体的な人名が出てこないのは手がかりが不足しているからだ。清末時期には日本語を理解する多数の人々がいた。

#### 漢訳外交奇譚

蘆花	漢訳題名	漢訳者	掲載 収録
5 王の紛失	竊皇案	法人某著、中国某訳	『新民叢報』第33-34号 1903.6.9-6.24 〔『説部腋』と同文〕
	返魂香	喋血生	『浙江潮』第8期 1903.10.10
	竊皇案	披髮生(羅普)重訳	横浜・新小説社 1905
	竊皇	披髮生(羅普)訳	『説部腋』1905.11.21 〔『新民叢報』と同文〕
6 鞭の痕	(外交小説)一条鞭○	不記	『外交報』第97-98期 1904.12.1-11
7 土京の一夜	(外交小説)波斯剪○	不記	『外交報』第96-97期 1904.11.21-12.1
1 鉄公の退隱 初出不明	外交家之狼狽	法国某著、中国某訳	『新民叢報』第27、29号 1903.3.12、4.11 〔『説部腋』と同文〕
	俾斯麦之狼狽	披髮生(羅普)訳	『説部腋』1905.11.21 〔『新民叢報』と同文〕
10 とりかへ子	(外交小説)易児説○	不記	『外交報』第98-99期 1904.12.11-21
11 三刺客	(外交小説)三刺客○	不記	『外交報』第99-100期 1904.12.21-31、

(北欧朝廷異聞)			1905.1.10
3 百合の花	(海外奇譚)百合花○	無名	『新民叢報』第12号 1902.7.19 『説部腋』と同文)
	百合花○	闕名	『説部腋』1905.11.21 『新民叢報』と同文)
	(海外奇譚)百合花	無名	横浜・新小説社 1905
	百合花○	無名	『新稗海』刊年不記 『説部腋』と同文)
4 冬宮の怪談	(語怪小説) 俄皇宮中之人鬼△	曼殊室主人訳	『新小説』第2号1902.12.14 『説部腋』と同文)
	俄皇宮中之人鬼	著訳者不記	『萃新報』第1-3期 1904.6.27-7.26
	俄皇宮中之人鬼△	曼殊室主人訳	『説部腋』1905.11.21 『新小説』と同文)
	(語怪小説) 俄皇宮中之人鬼	梁啓超重訳	横浜・新小説社 1905
	俄皇宮中之人鬼	梁啓超著	『小説零簡』1916.9
	俄皇宮中之人鬼	梁啓超	『小説伝奇五種』1936.3
8 法王殿の墓	(外交小説)瑪瑙印	不記	『外交報』第72、77期 1904.3.31、5.19
2 白糸	(外交小説) 白絲線記○	法国某著、披髮生(羅普)訳	『新小説』第6号 1903.8.7 『説部腋』と同文)
	(外交小説) 白絲線記	(日) 週遊生訳、中訳者不詳	横浜・新小説社 1903
	白絲線○	披髮生(羅普)訳	『説部腋』1905.11.21 『新小説』と同文)
9 一億万法(一億万法の賭博)	(外交小説) 埃及妃○	不記	『外交報』第77、92、93期 1904.5.19-10.23
12 大使夫人初出不明	(外交小説) 紅花球○	不記	『外交報』第93、96期 1904.10.23、11.21

先の「竊皇」(「5 王の紛失」)は別稿を参照されたい。漢訳公表順で「百合花」に進む。蘆花日訳には掲載順の数字を示す。

### 5 「3 百合の花」のばあい

原作題名は「エリゼ宮の醜聞 [A SCANDAL AT THE ELYSÉE]」という。エリゼ宮は大統領官邸である。その住人はマクマオン将軍だから彼にまつわる醜聞というのが原題だ。

蘆花「百合の花」の由来は本篇においてユリの花が重要な役割りをになっていることによる。無名(以下、闕名)漢訳も「百合花」である(別稿「周瘦鵑「百合魔」の底本」を参照)。蘆花日訳を引用するときルビ、傍線は省略、くり返し記号は文字に置き換えることがある(以

下同じ)。

蘆花前言から見ていく。

#### 【原作】なし

【蘆花】普仏戦争の結果、奈翁三世の朝倒れて、第二共和政府仏国に立つに當り、第一に大統領となりたるはチエール氏にして、氏について千八百七十三年より千八百七十九年まで大統領たりし者はマクマホン將軍とす。／將軍はもと愛蘭血脈の人、奈翁三世の下に立身して陸軍大将となり、普仏戦争に負傷せしが、帝国滅亡後も見栄好きなる仏人に擡げられて、終に王党帝政党などの加勢によりて大統領となりぬ。將軍も就職後久しく事無く過ぎて、別に異志なきも

のゝ如くなりしに、一朝事によりて辞職の已む可からざるに到りしは、(本篇の作者が言によれば)左の如し。64頁

【闕名】千八百七十九年。法国大統領麦馬韓。一朝辞職而去。当日各報伝聞。皆謂別有深意存乎其間。故敝雇万乘。毫無顧惜。而不知有大謬不然者。乃誤於一枝百合花耳。91頁

1879年フランス大統領マクマホンはある日辞職してしまった。当時新聞は、そこには別に深い意味があったから首領という地位を破れ靴のようにまったく重んじなかったのだと報じた。しかしそれが大間違いであったことを知らなかった。すなわちユリの花1輪によって失敗したのである。

蘆花前言は彼独自の見解を示して成立している。アップワード原作には似た個所があるにしても蘆花の方が詳細だ。また闕名前言も蘆花前言とは違う。下線部分がかろうじて共通しているくらいだ。マクマオン将軍の経歴について漢訳しなかったのは本文において説明があるからだろう。重複を避けた闕名の判断は適切である。また首相を辞職した原因をユリの花だと不思議な記述をして物語の全体を予告した。この部分は蘆花の「然るに此頃<sup>に</sup>到て誰言ふとなく伝ふる所によれば、偕も意外、麻將軍を倒したるものは陰謀の露頭ならで、香りも深き一朶の百合花なりとは」(65-66頁)を前に移動させたものだ。闕名なりの工夫をしている。

アップワード原作の冒頭を引用する。

【原作】“How is it, M. l'Ambassadeur, that while you have confided to me so many surprising incidents connected with foreign Courts, you have not yet related to me some history of which Paris has been the theatre?” p.191

「大使閣下、外国の宮廷にまつわる驚く

ような出来事を数多く私に話しておられるのに、パリが舞台となった歴史についてはまだ話してくださらないのはどういうわけでしょうか」

場所はビリヤード(撞球)場だ。聞き手の青年は大使に向かって上のように質問して物語は始まる。蘆花はここを無視したから闕名漢訳にもない。

フランス大統領マクマオン将軍が突然辞職して話題になった。陰謀説もあったが真相はユリの花が原因だ。その内幕話を大使が語る。

アップワード原作と蘆花日訳が重なる個所を示す。といっても蘆花は直訳しているわけではない。

【原文】“There was the MacMahon affair, which was not without interest, and to which, moreover, those miserable journals never really obtained a clue.” p.193

「マクマオン事件があったが、この事件には関心がなかったわけではなかったし、しかもあの惨めな新聞はその手がかりを得ることができなかったからね」

【蘆花】「早や二十年の昔となりしが、仏国大統領麻克馬奔(マクマホン)将軍一朝突然辞職して世を驚かしたることあり。当時其原因として各国の新聞に載せし所にては、何か共和政府の首領たる身にあるまじき陰謀ありし様にて、世間の疑惑は一ト方ならざりき。65頁

マクマオン事件について新聞が真相を突き止めることができなかったという点がかろうじて共通するだけ。蘆花は加えて背後に陰謀があったことを示唆して読者の気を引いた。闕名はそれも省略した。蘆花と闕名が一致するのはその後が続く個所だ。アップワード原作も示す。



【原文】The late Duke of Magenta, as you know, without doubt, was an Irishman by descent, and was not free from the impulsive temper of his truly generous countrymen, who have always been so much esteemed by France. He was at the same time a sincere patriot; and in spite of the fact that he owed his Marshal's baton and his dukedom to the Third Napoleon, he remained faithful to the Republic of the Fourth of September. pp.194-195

ご存知のように、先のマジエンタ公爵(マクマオン)はアイルランド人の血を引いており、フランスが尊敬してやまなかった同胞の気性の激しさとは無縁ではなかった。彼は同時に誠実な愛国者でもありました。そして元帥の勲章と公爵位をナポレオン3世に負っているにもかかわらず、彼は(1870年)9月4日共和国に対して忠実であり続けた。

【蘆花】抑も麻將軍は奈破烈翁第三世の下に立身して、陸軍大將に任じ、公爵に叙せられしも、人となり愛国の念深ふして、奈翁覆滅後は共和政府に忠義此上なく、終に智衛爾(チエール)の跡を承けて大統領と迄なりし人物なりしに、斯る陰謀を企てしとは驚き入つたる次第なりとて、爪弾する人と多かりける。65頁

【闕名】麦馬韓。拿破侖三世之陸軍大將也。以功叙爵。其為人性温厚。愛国心最重。迨拿破侖三世被擒後。人民称其忠義。舉為大統領。以承參亞之後。91頁

マクマオンはナポレオン3世の陸軍大將である。功績により爵位を与えられた。その人となり温厚で愛国心が最も厚いためナポレオン3世が捕らえられたあと人々はその忠義を称えて大統領となしチエールのあとを引き継いだ。

蘆花日訳はアップワード原作を踏まえてはいない。ただし逐語訳にはしていない。蘆花なりの要約による書き換えと先代大統領アドルフ・ティエールなどを加筆している。蘆花前言と重複する箇所がある。それは気にしなかった。この部分について闕名の漢訳は蘆花の前半部分を直訳した。つまり陰謀云々は省略したということだ。

將軍は花を愛でるのが趣味だった。エリゼ宮の庭園でも花を育て十分に手を入れていた。ある朝、彼の食卓に小さなユリの花束が皿に載せられているのに気づいた(to perceive on his plate a tiny bouquet of lilies. p.195)。こうして將軍の愛情物語が始まる。

蘆花は「或日將軍朝餐の卓に就きしに、一束の百合花を皿に載せたり」(66頁)とそのままとを翻訳した。ところが闕名はそれに少し変化をつける。すなわち「見胆瓶中。挿有百合花一束[見れば細口胴丸の花瓶にユリの花束が挿されている]」(91頁)である。もとの皿を花瓶に置き換えた。漢訳する際には書き換えることが許されていると考えているらしい。

後に公表される白話の選録「百合花」(香港『廣東日報』1906.1.4-8。梁冬麗、劉曉寧整理『近代嶺南報刊短篇小説初集』上 南京・鳳凰出版社2019.1所収)および文言の周瘦鵑「百合魔」(1911)にはこの花瓶の描写がある。両作品とも闕名漢訳にもとづいて書き換えた派生作品だとわかる。

將軍にユリの花を送ったのは謎の人物だ。使用人を問い詰めるとある者が言うには覆面をした若い美女だと答える。將軍は老人とはいえフランス人だから恋愛感情には敏感だ。彼は美女ユリ姫の方から誘っていると考えた。そうして3日目の朝のユリの花束には紙片が入っていた。ユリの花をなぜ身につけないのか、と將軍に問うている。それが合図だ。

【原作】On this afternoon MacMahon

drove forth as usual, but it was observed that, contrary to his usual habit, the President wore in the buttonhole of his coat a superb bouquet of flowers, which completely concealed his Grand Cross of the Legion of Honour. p.199

この日の午後、マクマホンはいつものように馬車で出かけたが、いつもの習慣に反して大統領はコートのボタン穴に見事な花束を挿しており、その花束がレジオンドヌール勲章を完全に隠していた。

【蘆花】此日麻將軍は例の通り馬車を駆りて出でたりしが、常に引かへ外衣の扣鈕穴に美しき花束を挿みたれば、帯びし名誉大十字勲章も掩はれて見えざりけり。此花は言ふ迄もなく例の百合花なり。69頁

レジオンドヌール勲章（フランスの最高の功績勲章）を蘆花は「名誉大十字勲章」と翻訳した。加筆して花束がユリの花であることを念押しした。ユリの花が勲章を隠すかたちになっていて目印になる。ここは原文を直訳している。ところが闕名漢訳は少し異なる。

【闕名】乃將此花挿於十字勲章處（割注：現各国君主之服其左襟上。必掛一十字[字]大勲章以為表記耳）92頁

そこでその花を十字勲章の所（割注：現在、各国君主の服の左襟に必ず十字大勲章をつりさげて記念とする）に挿した。

闕名の漢訳は蘆花日訳を半分しか翻訳しておらず不十分だ。しかも誤解を生じかねない説明である。勲章はいつもつけている。今回はその上にユリの花がかぶさって勲章を隠した。それが常とは異なるといっている。

それを勲章の場所に花束を挿入したと闕名は漢訳した。割注によると左襟にボタン穴があるようにも受け取れる。だが勲章はもともとボタ

ン穴に挿しているわけではない。闕名の記述するように「掛 [つりさげる]」である。ゆえに勲章の所にユリの花を挿すことはできないのだ。だから両者は理解不能な位置関係になる。これでは誤訳だといわれてもしかたがない。

蘆花と闕名でもう少し顕著な違いがある個所を示す。ユリの花を合図にして將軍は馬車に乗った美女と最初の遭遇をした。翌朝のユリの花には紙切れにありがとう「*Thanks!* / 多謝 / 感謝深情」（p.201 / 70頁 / 92頁。原作、蘆花、漢訳の順。以下同じ）とひとことある。その後の將軍を説明して両者が異なる。

【蘆花】麻將軍はいよいよ興に乗りて、其日も件の花を帯びて馬車をボア、デ、ブーロン池畔に駆りつ。かねて期したる事なれば、件の覆面美人の馬車と見るより早く扣鈕穴に挿したる花をぬきとりて、すれ違ひさまに花を吾唇に當てたり。美人は少しく覆面をあげて、玉の如き頤と薔薇の唇を見せつ、微かに揖して過ぎぬ。71頁

【闕名】將軍遂將此帑密藏衣袋間。日夕觀視。柔腸欲斷。魂夢依稀。髣髴麗人在前。92-93頁

將軍はそこでその紙をポケットに秘藏して朝晩じつとながめると悲しくて腸が千切れそうになり魂は夢見心地にぼんやりとしてまるで美人が目前にいるかのようだった。

「ボア、デ、ブーロン」はブローニュの森（the Bois de Boulogne / 波羅）のこと。池があるから「池畔」である。蘆花はアップワード原作に忠実だ。馬車での逢引きを重ねて將軍が美女に心を奪われていく様子を描写した。ところが闕名はそれとは関係のない上の記述を創作している。ここは漢訳ではないといわざるをえない。闕名はこの時点では直訳ということを考えていないようだ。

美女は將軍に新たな提案をした。ユリの花を

直接手渡してほしければエリゼ宮園の小門の鍵を小姓にもたせろという。原文は「*let your page bring me a key to the small gate of the Elyse/e gardens*」(p.202) すなわち蘆花の「御小姓してエリゼー園の小門の鍵を妾に齎らせ玉へ」(71-72頁)だ。関名はこの個所を省略した。

將軍はユリ姫と面会した。美女はひとつの謎解きをする。合図に使用したユリの花には意味がある。すなわちフランス王党の象徴なのだ。つまりそのユリ姫は王党を代表して將軍を誘い会っている。その目的は將軍が大統領職にある時期に彼を動かしてシャンボール伯アンリ5世を王位に擁立することだった。ユリ姫こそはアンリ5世の王女である。ただしアンリ5世には子供はいないというからユリ姫はアップワードの創作だ。

ここに將軍とユリ姫の意識の差が露出する。將軍はユリ姫から誘われているという恋愛感情を持つ。ユリ姫は最初から色香を利用して將軍を引きつけ自分の思うとおりに操ろうとしている。この認識差が本篇の眼目だ。

ユリ姫に惑わされた將軍は彼女と会うために王党の本陣である旅館フルール・ド・リス「*Fleur de Lys*／フルール、デ、リス／台爾利士」に足を踏み入れた。將軍は自分がユリ姫に利用されているのではないかと疑いはじめた。ふたりの言い合いがはじまる。重要な個所はつぎだ。ユリ姫の発言である。

【原作】 If our meeting is not political you are not compromised at all-and I am compromised unless it is political. p.216

私たちの会合が政治的なものでなければ、あなたは全く傷つきません。そうして政治的なものでない限り、私は傷つくのです。

【蘆花】 今日の御面会が政治に関係せし事ならずば、閣下は何の迷惑をか受け玉はむ。但此が政治の事に関したる面会ならでは、

妾は此上なき迷惑を受け侍る。86-87頁

「*compromise* [傷つける]」が鍵語だ。政治的であるかないか、それが問題である。

政治的なものとはシャンボール伯アンリ5世「*the Comte de Chambord: Henri v*／シャンボール伯アンリー五世／蝦母波爾伯阿力五世」を王位につけるという要求を指す。政治的でないとユリ姫と將軍の恋愛沙汰を指す。面会の目的によって將軍とユリ姫では反対の結果をもたらす。すなわち政治的なものではない(=恋愛沙汰)ならば將軍は傷つかないがユリ姫の方は傷つくという意味である。恋愛に寛容なフランスの事情が背景にある。しかしユリ姫にとって目的は政治的なものだから明らかにそれと異なって致命的だ。

將軍は恋愛だと考え、ユリ姫は政治目的で將軍に接近したということだ。

蘆花日訳はアップワード原作を直訳している。ただしその表現が関名にとっては解説がむづかしかつたらしい。ユリ姫の発言を次のように漢訳した。

【関名】 今日事若無関於政治。或謂君受疑。亦未可知。不然。又何疑惑之有。99頁

今日の事が政治に関係しないものでしたら、あるいはあなたは疑われるかもしれませんが。そうでないならどんな疑惑があるのでしょうか。

將軍の恋愛ならば疑われ、そうでないなら疑われることはない。蘆花日訳とは逆の意味に理解している。しかもユリ姫自身については省略した。

そこに警視總監が踏み込んだ。彼は將軍に告げてユリ姫が共和政府転覆の陰謀を行なっている人物だという。関名はそれを書き換えて「又目麗人曰。此女子纖纖如不勝衣。亦未像有政治深謀者[麗人を見て言った。「この方は着物の

重さにもたえられないくらいにか細く、政治的陰謀にかかわっているようにも見えませんが」]

(100頁)とする。この箇所をなぜ蘆花日記とは関係のない漢訳するのか不可解だ。

將軍は岐路に立たされた。政治的陰謀を知ってユリ姫と会っていたのであれば將軍は大統領の地位を失う。そもそも將軍はユリ姫に対する愛情を抱いて会っているのだ。しかし彼は見栄をはって証言した。

「The meeting between this lady and myself has concerned a question of politics [この女性と私の出会いは政治的な問題に関係している] /此淑女と自分の会合したるは、政治問題に関する要務の為なり/今日我与此女会。乃政治上関係事。勿多談也 [今日私がこの女性と会合したのは政治的に関係していることだ。多くを言うな]」(p.218/90頁/100頁)

將軍の偽証言についてアップワード原作、蘆花日記、関名漢訳ともに一致している。

関名は最後に加筆する。將軍が部屋を出て行ったあとの情景を述べる。

【関名】惟案間尚置有百合花一大束。其馨芳不減昔日耳。100頁

ただ机にはユリ花の大きな1束が置かれておりその芳香は以前と変わらなかった。

本篇はユリ花で始まったからユリ花で締めくくったわけ。

こうしてマクマオン將軍は辞職した。そこで蘆花は物語を打ち切った。小説としてそう終わるのがよいという判断である。関名はそれを受け入れて同様だ。しかしアップワード原作には続きがある。

聞き手の青年は大使にユリ姫がその後どうなったのか質問した。大使は質問するなど答えた。そうして最後は青年による次の台詞だ。「However, I have not found it impossible to make a guess

at the mysterious source from which the Ambassador received his information. [しかし、大使がどのような謎めいた情報源から情報を得たのか、推測することは不可能ではない]」(p.219)

ここは暗示だ。大使はユリ姫から直接情報を得ていたということを青年は言いたかった。本篇において大使が活動する場面はない。そこで最後に出演させたというわけ。

関名の漢訳は省略と書き換えが比較的多いように見受けられる。のちに不記が『外交報』に掲載(1904-05)した漢訳連作とは違う印象を持つ。落差を感じるということだ。

## 6 「4 冬宮の怪談」のばあい

原作題名は「冬宮殿の幽霊 [THE GHOST OF THE WINTER PALACE]」という。

漢訳は原作者不記、曼殊室主人訳「俄皇宮中之人鬼 [ロシア皇帝宮中の幽霊]」だ。漢訳は原作者のアップワードおよび日訳者の蘆花を明示していない。曼殊室主人はアップワード原作ではこの1篇のみの漢訳者だ。ほかを言えば関名が1篇、羅普が3篇、不記が7篇となる。

曼殊室主人については梁啓超、梁啓勳、麦孟華などの諸説がある。

前出『説部腋』には飲冰子訳「世界末日記」が収録される。梁啓超の筆名だ。そこまではいい。しかし「俄皇宮中之人鬼」のばあいは曼殊室主人訳とあって飲冰子とは別物である。該書の編集者は内部事情に詳しい人だから梁啓超漢訳ならばそう記述するだろう。該作品はのちに梁啓超の名前を冠した著作に収録された。とはいえそのまま梁啓超の漢訳とするのは短絡しすぎだと考える。本稿では曼殊室主人を使用する。

蘆花の前言を見る。曼殊室主人漢訳につけられた「訳者識」の下線部分とほぼ重なる。

【原作】なし

【蘆花】冬宮は聖彼得堡にあり、露帝の皇

居。宏壯、世界無比と称す。露国先帝亜歴山三世は明治廿七年十月クリミヤの離宮に崩じ、翌月聖彼得堡に於て莊嚴なる儀式を以て葬られ玉ひしは誰も知る所なり。本編は畢竟原作者の架空談のみ。然架空談なりと雖とも、露国朝廷の内幕、無限の権力を持して無限の束縛を感ずる金冠の懊悩は、略此篇によりて視ふ可し。91頁

【曼殊室主人】此篇乃法国前駐俄公使某君所著也。俄前皇亜歴山大第三。以光緒二十年十月。崩於格里迷亜之離宮。旋以莊嚴之儀式。帰葬於聖彼得堡。其誰不知。此文不過著者之寓言耳。雖然。其描写俄廷隱情。外有無限之威權。内受無量之束縛。殆有歴歴不可掩者。専制君主之苦況。万方同概。豈惟俄皇。訳此以為与俄同病者弔云爾。訳者識。21頁

本作はフランスの前ロシア駐在公使某君が書いたものである。ロシアの前皇帝アレクサンドル3世は光緒二十年十月クリミヤの離宮に崩じるや直ちに莊嚴な儀式によって聖彼得堡に葬られたのを誰が知らないであろうか。本篇は著者の寓話にすぎない。しかしながらそのロシア朝廷の内幕を描写している。外に無限の権威を持ち、内に無限の束縛を受けていることはおそらくあきらかに隠すことはできないものだ。専制君主の苦境は世界で同じでありロシア皇帝だけであるはずがない。本作を翻訳してロシアと同病のものを弔わんとしかいう。訳者識。

漢訳者識の下線部分は蘆花前言を下敷きにして漢訳したと考えていいだろう。ただアレクサンドル3世(Alexander III)について蘆花は「亜歴山三世」としたが曼殊室主人は「亜歴山大第三」と漢訳している(傍点筆者)。もう1ヵ所(23頁)も同様だ。しかしそれ以外は「亜歴山第三」として不統一である

曼殊室主人「識」冒頭の「此篇乃法国前駐俄公使某君所著也[本作はフランスの前ロシア駐在公使某君が書いたものである]」とはなにか。ここは明らかに小説の主人公についての説明だ。だが蘆花日訳では「仏国全権大使」(92頁)であって公使ではない(同じ例は蘆花96頁/曼殊室主人24頁にもある)。細かい個所が違う。蘆花は別の作品(「法王殿の墓」)で「大使[ambassador]」を「公使」と訳すこともある。書記官(173頁)から公使(代理公使。37頁)を経て大使になったという理解だ。ただしここでは「大使」だ。

それよりも曼殊室主人の書き方からすればそのフランス人が原作者であるかのような印象を与えている。小説に登場する主人公と原作者アップワードを混同しているのだ。そうならば羅普が蘆花日訳について「法国某著」と誤記していたのと同類である。フランス人が主人公だから原作者の国籍もフランスだと羅普は誤解した。そこから曼殊室主人は羅普に近いところにいるとわかる。

ただし羅普は蘆花前言を「白絲線」1篇を除いて採用しなかったが曼殊室主人はそれを取り入れている。といっても書き換えがあるから蘆花前言をほぼ漢訳した関名とも異なる。また「訳者識」と示したものは曼殊室主人漢訳以外には見えない。

上文結末の「与俄同病者[ロシアと同病のもの]」とは清朝政府を指す。あてこずっている。こういう政治的発言をつけ加えているのも不記漢訳とは異なる点だ。

結局のところ曼殊室主人は羅普、不記および関名と距離を保ちながら個人として独立しているというのが筆者の考えである。

明治廿七年はまさに光緒二十年(甲午)であって1894年に当たる。アレクサンドル3世(1845-94)崩御の年だ。

それにしても小説を日訳して蘆花が「作者の架空談」とわざわざ念押しするのも奇妙なもの

だ。アップワード原作は史実を基礎にしてそれに虚構を滑り込ませて成立している。しかし本作は死んだはずのアレクサンドル3世が生存していたというのだから蘆花は一言つけ加えざるをえなかった。

アップワード原作では大使と聞き手がチェスを行なっているところから物語がはじまる。蘆花はチェスの場面約2ページを黙殺した。その後もチェスに関してはすべて消去している。ゆえに曼殊室主人漢訳にもチェスは登場しない。

蘆花日訳とその漢訳の冒頭を対比する。原作の該当部分も示す。

【原作】 My friend, have I by any chance led you to mistake me for a romancer, a poet? Rest assured that the facts I shall narrate to you are perfectly authentic, and are known to several persons in the inner circle of the Russian Court. I merely observe to you that my story is incredible; I do not say that it is absurd. pp.221-222

君、ひょっとして私が小説家または詩人だと君に勘違いさせてしまいましたか。私がこれから話すことは完全に本物であり、ロシア宮廷の側近の何人かは知っていることですから安心なさい。私の話は君にとって信じられないというだけです。馬鹿げているとは言いません。

【蘆花】君よ、幸に余を小説家または詩人など云ふ者になりしとばし思ひ謬まり玉ふな。余が今君に語らむとする一条の話は正しき事実にて、露国宮廷の内幕に参する人達は確かに知る所なり。唯其話の殆んど尋常あり得可からざるものあるが故に、君も或は一篇の小説と看做し去らむことを患ふる耳。91-92頁

【曼殊室主人】余不幸以小説家聞。今將執筆述一親見之怪事。此其事苟稍識俄国内情者。眼光応能照及。猶恐読者以出余手筆。

且以事實類于不經。或疑為子虛賦烏有先生伝。則大失余意矣。故今先与読者約。必毋以読小説之意読茲篇。21頁

私は不幸にして小説家として有名だ。今自分の眼で見た不思議なことを述べようと思うが、このことはロシア国内の事情を少しでも知る人達であれば見通しているはずのものである。読者はたぶん私が述べるものが常道にそむくものであるから、あるいは架空であつて名無し人のことを述べていると疑うかもしれない。そうであれば私の考えを大きく取り逃がす。ゆえに今読者にまず約束してもらいたい。小説を読む考えで本篇を決して読んではならない。

アップワードは本篇の内容が信じられないかもしれないが事実だということを強調する。それはそうだ。死者が生きると叙述するのだから。

蘆花もそこは理解している。小説つまり虚構だと考えるな、と重ねて説明するところがそれだ(前言で「架空談」と書いたのは矛盾する)。アップワード原作にあることを蘆花は意識して、大使は小説家にも詩人にもなっていない、事実を述べていると力説する。蘆花が使用する「ばし」は古語で会話文に多く見られ「など」という意味。また「君よ」を残して大使と聞き手のふたりがいることを示す。

だが曼殊室主人はその粹組みを無視する。さらに「余不幸以小説家聞 [私は不幸にして小説家として有名だ]」と誤訳した。蘆花日訳は確かに「思ひ謬まり玉ふな」と述べて考え違いしないように、と聞き手に要望している。間違えるような個所ではないように思う。なぜ曼殊室主人のような漢訳になるのか不可解だ。

さらに蘆花日訳が大使と聞き手の会話で成立している基本的事実を省略した(後述)。それ以外の部分は蘆花日訳を把握して意識している。本篇を小説と考えるな、という個所について表

現は異なるが意味は共通する。

ヨーロッパの人々はロシアのことを理解しない。そうアップワードは述べる。

【原作】 The peoples of Western Europe do not understand Russia. It is, of course, of official Russia, the Russia of the Government, that I speak. p.222

西ヨーロッパの人々はロシアを理解していません。もちろん私が話しているのは公式のロシア、政府のロシアについてです。

【蘆花】 西欧の人は更に露西亜をば解せず。余が露西亜と云ふは、無論民の露西亜にあらで、官の露西亜、政府の露西亜なり。92頁

大使がロシアというのは政府のロシアだ。ロシア政府について知る人はいない。蘆花は「民の」を書き加えてほぼ直訳している。ところが曼殊室主人漢訳は大筋を把握しているのだが細かい個所が異なる。

【曼殊室主人】 歐洲人以外交家自許者甚衆。而無一人能知俄羅斯。非不知俄羅斯。不知俄羅斯之政府也。21頁

ヨーロッパ人は外交家を自負している人がとても多い。しかしロシアを知ることのできる人はひとりもない。ロシアを知らないのではなく、ロシア政府について知らないのだ。

人々はロシア政府について知らない。そこは漢訳している。しかし蘆花日訳にない「外交家」をなぜ持ち出すのか理解しにくい。しかも蘆花がロシアにつけた修飾語「民の」を省略している。せつかく「民」と「官」「政府」を対比させているのだから片方の「民」を無視するのはよくない。

ロシア皇帝は君主独裁政治にして生殺与奪権

を一手に掌握しているように見える。しかしその皇帝を裏で操る秘密組織が存在する。アップワードが本作の核心に据えた事柄である。

ロシア政府の中には秘密組織が存在する。それを説明する個所を見てみよう（英文斜体に対応する日訳には傍点を振る）。

【原作】 But the true Government of Russia is a secret society, the mysterious *Tchin*, which includes the whole of the official class, and in whose hands the Tsar is often no more than a puppet, powerless to exert his own will. pp.222-223

しかしロシアの真の政府は秘密結社であり、官僚階級全体を含む謎めいたチンであり、その手中にあるロシア皇帝は多くのばあい操り人形にすぎず、自らの意志を行使することはできない。

【蘆花】 然れど其内幕に立入れば、真に露国を支配するものは皇帝にあらで、或一種の秘密会、奇妙なる朋党にてあるなり。此秘密会は露国官吏全体を包含するものにて、皇帝も此仲間の手にかかりては、往々にして人形同様、更に自己の意旨を行ふの力なきなり。92-93頁

【曼殊室主人】 有俄国者非俄皇也。俄皇為獵犬。而別有驅而喉之者。俄皇為傀儡。而別有持而舞之者。喉之舞之者誰。彼其遺族官吏之中。自有一種不可思議之秘密党。盤踞全俄無上之勢力。逆者死。触者壞。22頁

ロシアを支配するのはロシア皇帝ではない。ロシア皇帝は獵犬であって駆り立ててしかける者が別にいる。ロシア皇帝は操り人形であり所有し舞わせる者が別にいる。けしかけ舞わせる者とは誰か。名族の後代官吏の中に一種の不可思議な秘密党があつて全ロシア無上の勢力を占拠している。逆らうものは死に、触れる者は壊れる。

アップワードが示す Tchín (チン) はロシア語の ЧИН だ。辞書的にはロシア帝国における役職の階級、位階をいう。軍事、法廷、公務員などの役職の公的地位の階級で国家への個人的貢献に対して与えられる、との説明もある。

原作者がロシア語の音訳を挿入したのはロシア事情にも詳しいことを示すためだろう。ただその辞書の意味ではおさまりが悪い。だからそこは「a secret society [秘密結社]」と言葉を添えた。上位階級の複数人が組織していた秘密組織があるという設定なのだ。

蘆花はそのまま「或一種の秘密会、奇妙なる朋党」とわかりやすく翻訳した。

曼殊室主人は蘆花日訳の骨格は把握している。ただし直訳ではない。「獵犬」には「傀儡」、それぞれの動詞に「驅而喉」と「持而舞」を加筆して対句風に配置した。最後の「逆者死。触者壞 [逆らうものは死に、触れる者は壊れる]」は曼殊室主人が独自に書き加えた語句だ。どうしてもそういう風に飾って書きたくなるらしい。

皇帝暗殺を命令しているのはその秘密組織だというわけ。独裁政治の全権を握っていると考えられている皇帝ですら秘密組織の前では自己の生命の安全すら確保できない。ここが冬宮殿に幽霊が出現する伏線になっている。

関連して皇帝暗殺を引き起こしたのは虚無党ではないとも説明する。

【原作】 It is not the Nihilists who have set the fashion of assassinating Tsars. It is by the hands of their own ministers and courtiers that the monarchs of Russia have most often perished. p.223

ロシア皇帝暗殺の流行を作ったのは虚無党ではない。ロシアの君主たちが最も多く命を落としたのは自らの大臣や廷臣たちの手によるものだった。

【蘆花】 露帝暗殺の流行を起したる者は、虚無党と思ひ玉ふな。露国の君は吾大臣侍

従の手によりて崩れ玉ひしが多かるに。93頁

【曼殊室主人】 従俄皇屢代遇刺。万乗之尊。如豕在牢。不知者以為全属虚無党使然。而豈知其斃於親臣大臣之手者。尤夥且毒。22-23頁

ロシア皇帝がしばしば暗殺されるところから、皇帝がまるで便所の豚のようだというので、知らない者はすべて虚無党がそうさせていると考える。しかし侍従大臣の手にかかって死ぬものの方が非常に多くかつ残忍であることをどうして知っているだろう。

蘆花日訳はアップワード原作をよく引き写している。一方の曼殊室主人漢訳は蘆花日訳にもとづきながらも語句(「万乗之尊。如豕在牢」「尤夥且毒」)を追加して微妙に変化を与えていることがわかる。

曼殊室主人は部分的に語句の追加をするのは上のおりだ。一方で蘆花日訳を部分的に削除してもいる。

アレクサンドル3世がクリミアで死去した時、新聞記者は大いに書き立てた。

【蘆花】 君も知らるゝ如く、先年亜歴山三世の崩御あるや事は帝国の片隅黒海の浜に起りしなれば新聞の通信員は宛ながら飢鳥の如くに其場に群がり、おのおの吾れ知り貌に見て来た様なる記事を播き散らしつ。殊に今帝尼格拉二世が臨終近き先帝の御諚により、父君の御息のある内に忙はしくアリス内親王と婚を結び玉ひしなど、小説的の事ありしまゝに、然る事には抜目なき新聞記者が、何角と仰山に書き立てつ。世間の同情は一に露国帝室の上に集まりて見へき。93-94頁

【曼殊室主人】 歳甲午。西曆十月。俄前皇亜歴山大第三以病不起聞。各国報館。皆舐



筆争紀其事。23頁

甲午(1894)の年西暦10月、ロシアの前皇帝アレキサンドル3世が病気で再起不能というニュースを各国の新聞社はこぞって筆をなめ、争って記事にした。

皇帝崩御の原因と年月についてアップワード原作は書いていない。だから蘆花も翻訳していない。ところが曼殊室主人は病気であることと「歳甲午。西暦十月」を補って記述した。それらを補足する知識があった。ただし年月は1894年11月1日(ユリウス暦10月20日)だから曼殊室主人がユリウス暦を採用した理由は不明。

上文を見ればわかる。新聞記者が好き勝手に記事を書き散らしたという部分だけを圧縮して漢訳した。アレクス内親王との結婚など後半部分は削除している。

新しい皇帝ニコライ2世はサンクトペテルブルクの冬宮殿に住まいを定めた。進歩党などは新皇帝が自由主義の政治を実行するのではないかと期待するのだ。曼殊室主人が省略した大使の発言箇所を示す。

【原作】Fools! As if the *Tchin* ever died, or its policy could be changed by the mere replacing of one royal figurehead by another! p.225

愚か者め! あたかもチン(注: 秘密結社)が死んだかのように、あるいは王室の看板を別の人物に置き換えるだけでその政策が変更される可能性があるかのようではないか!

【蘆花】愚かや、秘密会は依然として存するものを帝王一人更ればとて秘密会の政略は変らじものを。94頁

【曼殊室主人】なし

秘密組織が存在するかぎり政策の変更などあ

りえないことを述べる。その強固さを示したここは重要部分だ。曼殊室主人のように省略すると本作の主旨が不鮮明になる。

アップワード原作は大使と聞き手の対話で成立している。既述したように曼殊室主人はこの構造を差し置いて一人称記述に書き換えた。その1例を次に示す。

【原作】You must know that the Winter Palace is one of the most colossal buildings in the world. p.230

君も知ってのとおり冬の宮殿は世界で最も巨大な建物のひとつだ。

【蘆花】君も知らるゝなるべし、露帝の住み玉ふ冬宮は世界屈指の宏大なる建物にて、(後略) 97頁

【曼殊室主人】我輩嘗読俄国史者。必能知俄皇所住冬宮。為世界上著名壯麗之宮殿。無俟余喋喋。25頁

我らロシア国史を読んだことのある者は、ロシア皇帝の住む冬宮殿は世界で著名な壮麗の宮殿であることを必ず理解している。私がくどくど喋るまでもない。

曼殊室主人漢訳には大使が呼びかけた「君」は存在しない。改変しているのだ。そこは省略しながら「我輩嘗読俄国史者」をつけ加えている。直訳する意志が見えない。なにかと書き換えるのが翻訳だと考えていそうだ。

サンクトペテルブルクの冬宮殿に幽霊が出現するという噂が立った。逝去したはずのアレクサンドル3世その人だという。大使の知人にネスチコフ公爵夫人「Princess Nestikoff/子スチコツフ/尼士智俊」がいた。その息子ボリス「Prince Broris Nestikoff/ボリス/波里斯」は冬宮殿に勤務中である。幽霊の目撃者はボリスだ。

ボリスが冬宮殿で夜勤を務めていた時、庭に人影があるのを目撃した。不審者がいることを

上級に報告するのは危険すぎる。報告を受けた人物が虚無党である時はボリスが殺される。またその不審者の身分もわからない。報告した結果ボリス自身に危険がおよぶこともある。大使は聞き手に語る。

【原作】 Believe me, in Russia, to be too zealous a courtier is hardly less dangerous than to be an actual conspirator, as you will perhaps realise when you have heard my story. p.233

信じてほしいのだが、ロシアでは廷臣があまりにも熱心であることは、実際の陰謀者であることと同じくらい危険であることを私の話を聞いたら理解すると思う。

【蘆花】よく聴き玉へ、露西亜にては、忠義過ぎたる忠臣の身危きこと、謀叛の罪人其人にも劣らぬなり。余が話を聞かば、成程と君も頷づき玉ふなる可し。101頁

【曼殊室主人】蓋盡忠皇室之人。其危険殆与謀逆者等。専制国之通例然也。26頁

そもそも皇室に忠義をつくす人の危険なことは謀叛人とほとんど同じである。このことは専制国の通例なのだ。

いうまでもなく蘆花の「余」は大使だ。「君」は大使の相手を指す。しかし曼殊室主人はその区別を無視した。ここの曼殊室主人漢訳は蘆花日訳をほぼ把握している。ただし後半の「専制国之通例然也」は加筆だ。独自につけ加えて記述する傾向が見受けられる。とはいえ全体を見れば自由気ままに書き直して筋を変更するまでには至っていない。蘆花日訳に基本のところまで従っているのは確かだ。

大使がある部屋で幽霊を突き止めた場面を見る。アップワード原作と蘆花ではその部屋にたどり着くまでの複雑な経路状況を説明している。だが曼殊室主人はそれらをすべて省略した。本筋とは無関係だと考えたようだ。幽霊目撃の個

所を示す。

【原作】 Never shall I forget the thrill, the absolute stupor of amazement, which overcame me at what I beheld. There, half-risen from the chair on which he had doubtless been seated when aroused by the creaking of the door, I saw the very figure which Boris had described to me, the tall form, the dark robes, and, above all, the pale and terrifying countenance of the monarch whose death had cast half Europe into mourning. p.245

私はその光景を目の当たりにしたときの恐怖と驚きの喚起を忘れることができないだろう。そこには、ドアの軋む音で目が覚めたときに座っていたはずの椅子から半ば立ち上がった、ボリスが私に説明してくれた、背が高く、黒い外衣、そして何よりも青白く恐ろしい表情をした、その死によってヨーロッパの半分が喪に服した君主の姿そのものを私は見たのです。

【蘆花】此時の仰天、此時の震慄、何時かは忘る可き。戸の軋る音にや驚きけむ、かけし椅子より半ば立上りたるは、宛ながらボリスの言に違はぬ丈高き黒衣の姿、其青ざめし恐ろしき顔は、誰あらふつい此頃崩御ありし先帝亜歴山三世！110頁

【曼殊室主人】余当時之驚詫。余当時之震慄。至今猶銘刻脑中欲忘不能忘。何以故。当開門一響之際。室内有一物。忽自椅上蹶起驚立。其物非他。正波里斯所謂身長八尺。服被黒衣。其容黯淡。其色悽涼。嗚呼。果身死未寒之亜歴山第三也。33頁

その時の驚愕、その時の震慄は今にいたるまで脳中に刻まれて忘れようにも忘れることができない。なぜならば戸が音を立てた時、室内のある物が椅子より驚いて立ちあがった。それはほかでもなくボリスの言

う、身長8尺、黒衣を着て、その表情は暗く顔色は悲惨な、ああ、はたして死して間もないアレクサンドル3世なのであった。

曼殊室主人漢訳は蘆花日記をほぼ直訳した。ただし「tall/丈高き」を「身長八尺」と具体的な数字を挿入している。他の個所では「七尺」(28、35頁)とした。一定していないし、だいいち数字を示す必要がない。直訳では満足せずなにかを加えたいように見える。

アレクサンドル3世が大使に告白した内容の一部が問題だ。曼殊室主人の漢訳は蘆花日記にもとづいていながらその意味を別物にしてしまっている。

【原作】 The fate of my father, Alexander II., slain by a bomb in the streets of St. Petersburg, is, of course, familiar to you . But it is not easy for you to realise the effect produced by that fearful event on my mind. p.248

サンクトペテルブルクの路上で爆弾によって殺害された余の父アレクサンドル2世の運命は、もちろん君もよく知っているだろう。しかしその恐ろしい出来事が余の心に与えた影響を君が理解するのは簡単ではない。

【蘆花】 父亜歴山二世が聖彼得堡の街上で爆裂弾の為に落命し玉ひしことは、卿も知りつらむ。然れど此一件が余の心に及ぼしつる影響をばよも思ひ知るまじ。112頁

【曼殊室主人】 余父亜歴山第二。在彼得堡街上。斃于炸薬。卿所知也。此等險象。余雖憚之。然不足為余恐。34頁

余の父亜歴山2世がペテルブルクの街上で爆弾にて落命したことは卿の知るところだ。この危険な現象について余は驚いたけれども余を恐怖させることはできなかった。

アレクサンドル2世の爆殺事件は1881年にサンクトペテルブルク(曼殊室主人は「聖」を省略)で発生した。息子のアレクサンドル3世がその事件で受けた心の傷は深かったという説明だ。いつ暗殺されるかわからない。その心理的圧迫には耐えがたいものがあった。

ところが曼殊室主人は「余雖憚之。然不足為余恐[余は驚いたけれども余を恐怖させることはできなかった]」である。原作および蘆花とは反対の漢訳にした理由はその後続部分にあるだろう。

【原作】 The perils of a battlefield may be faced by a brave man, in the enthusiasm which battle calls forth. p.248

戦場の危険であれば、戦いが呼び起こす熱狂の中で勇敢な男はそれに立ち向かうかもしれない。

【蘆花】 戦場の危難なれば、戦ひの熱に乗じて、勇者は恐れず侵すなり。112頁

【曼殊室主人】 兵凶戦危。常人所怯也。然乘好勝之心。毅然當之。曾不足為余懼。34頁

戦争の凶悪危険さに普通の人間は気弱になる。しかし勝気の感情に乗ってしまえばきっぱりと従事するものだ。余を恐れさせることはできなかった。

曼殊室主人はあきらかに「然不足為余恐」と「曾不足為余懼」をくり返している。両者は一致する。

曼殊室主人が誤読した原因はふたつある。蘆花の「思ひ知るまじ」の打消推量「まじ」(~ないだろう)を誤解した。加えて後続部分にてくる非常時は恐れない、に引かれた。文脈の流れから勝手に皇帝の心理に結びつけたと推測する。

ここまでの曼殊室主人漢訳は蘆花と相違する部分はあるにしてもおおよそは追従していた。

ところが独自に書き換える個所が出現する。アレクサンドル3世の告白だ。

【原作】 I am not ashamed to confess to you, Baron, that from the moment I ascended the bloody throne of Russia, my life was one long haunting agony. Never once did I have one hour of perfect freedom from care. And I could do nothing. I was helpless, a martyr bound to the stake of my autocracy. p.248

余は告白することを恥ずかしくは思わない、卿よ、余がロシアの血塗られた王座に就いた瞬間から、余の人生は長い苦悩の連続だった。一度たりとも不安から完全に解放された時間はなかった。余は何もできなかった。余は無力で独裁政治の杭に縛られた殉教者だった。

【蘆花】余は卿に白状す、血腥き露国の帝位に上りし以来、余が生涯は一申したる苦痛にて、唯の一刻も心安き時はあらず。余は何事も為す能はず。余は実に吾専制の杭に繋がれたる犠牲なりけるなり。112頁

蘆花は直訳している。アレクサンドル3世が苦痛を感じる原因はロシア皇帝の地位そのものだ。自由に振る舞うことが不可能なのである。それを強いているのは例の秘密組織であるという設定が背後に潜んでいる。

以上の部分を曼殊室主人は次のように漢訳した。

【曼殊室主人】余不幸登俄国血腥之帝位。自茲以往。遂無日不在愁困苦痛之中。一刻不能自安。自皮相者觀之。皆以余為君權無限。而不知余為左右所掣肘。無權無力。一事不能辦。天下不察。反以余躬為叢怨之府。嗚呼。余真無樂乎為君。以堂堂七尺之軀。乃僅為左右之傀儡。其有罪也在余躬。其有

危也在余躬。吾嘗自哀自訟。不知前世作何惡業。今乃託生為專制君主。歷盡人間世不能歷之苦況也。34-35頁

余は不幸にしてロシアの血なまぐさい帝位にのぼった。それ以来、難儀苦痛のない日はなく心安らかな時は一刻もない。表面を見て皆余の君權は無限であると考えるが、しかし余が側近に干渉束縛されて権力はないことを知らない。一事もなすことはできないことを天下はわかろうとはせず、反対に余自らが積怨の府であると考え。ああ、余に君主である楽しみはまったくなく、堂々とした7尺の体軀は側近の操り人形でしかない。その罪は余自身にあり、その危うさも余自身にある。われはかつて自分を悲しみ自分を責めもした。前世でどんな悪業を行なったのかわからないが今は専制君主に転生し人間社会で経験することのできない苦境を経験しつくしている。

前部分は蘆花の日記にもとづいた。だが後部分は曼殊室主人の作文だ。蘆花の「余は実に吾専制の杭に繋がれたる犠牲なりけるなり」をより詳しく解説している。ここでも皇帝の身長が「七尺」であると述べる。長身であることを知っていたからそれを強調したかったらしい。また原作と蘆花には書かれていない輪廻転生を挿入した。やはり曼殊室主人が清末の人だからだろう。

続いて人々がロシア皇帝アレクサンドル3世に改革を要求していることに言及する。口でいうのは簡単だが改革に着手すれば皇帝自身が致命的な目にあうのは必定だという。反対勢力がいるからだ。

【原作】 You are a man who knows Russia as few men know it, and you can tell me whether the first step in the direction of reform would not have drawn down on my

head the vengeance of men beside whom  
the Nihilists are bungling apprentices?  
pp.248-249

卿ほどロシアを知る人もおりますまい。改革の方向へ第一歩を踏み出せば余の頭に彼ら——その隣りの虚無党は下手な初心者だ——が復讐の鉄槌を下さないと言えるかね。

【蘆花】卿はよく露西亜を識る者、思ひても見られよ、若し一歩たり共改革に着手したらむには、彼者共＝虚無党の如きは門外漢のみ＝の怨讎を余が頭上に招かざる可きや、如何に。112頁

原文の「the vengeance of men [人々の復讐]」の men を蘆花は「彼者共 (かのものども)」と翻訳した。これは秘密組織を指す。ロシア皇帝はその操り人形にすぎないというのにつながる。本作においてロシア皇帝は虚無党があることを重視していない。アレクサンドル2世の爆殺事件も秘密組織の命令だという考えがあるからだ。その存在は虚無党を大きくうわまわり根深く巨大である。

曼殊室主人は直訳しない。

【曼殊室主人】若卿者。最熟悉俄国事情者也。卿為我設身處地。余果一從事改革。則彼等太后党世家党其有不欲得余而甘心者耶。35頁

卿はロシア事情に最も詳しい人だ。卿よ、われの身に生まれよ。余がはたして改革に從事すれば彼ら皇太后党、世襲党は余を逮捕せずに甘んじているだろうか。

まず虚無党が消滅している。「彼等 [彼ら]」とは「太后党世家党」だと具体的に説明した。この新しい単語を使用するのは本来からすれば不必要だ。曼殊室主人はすでに「秘密党」と訳している。もし補足するとすればこちらをあげるべきだった。

アレクサンドル3世は自分の安全と平安のためには人々を欺くほかになかった。それを聞いた大使は事情を了解してアレクサンドル3世のやり方を支持する。大使がこの物語を聞き手に話したのは前皇帝がすでにロシア帝国以外の安泰な場所に移動しているからだと締めくくった。

アップワード原作は、もっとチェスをしますか、と大使が聞き手に言葉をかけて結びとする。蘆花が省略したから曼殊室主人漢訳にも出てこない。

## 7 「1 鉄公の退隠」のばあい

原作題名は「ビスマルク公爵の失脚 [PRINCE BISMARCK'S FALL]」(雑誌初出は「ビスマルク公爵失脚の真相 [THE TRUE STORY OF PRINCE BISMARCK'S FALL]」)という。

蘆花はそれを「鉄公の退隠」と翻訳した。ビスマルク(1815-98)がのちに「鉄血宰相」と呼ばれる理由はドイツ統一には武力——鉄と血が必要だと演説したからだ。「鉄公」はそこからくる。

蘆花日訳を漢訳して法国某著、中国某訳「外交家之狼狽」(『新民叢報』)である。『新民叢報』第29号の文末には「未完」と表記するが漢訳自体は完結している。誤表記だ。

その訳者名と題名を変更して披髮生(羅普)訳「俾斯麦之狼狽」(『説部腋』)が単行本に収録される。漠然とした外交家ではなくビスマルクの名前を出した。漢語の「狼狽」は困り果てる、追い詰められるという意味。失脚の漢語は「下台」だからそれに比較するとやや軽い扱ひである。

蘆花は既述のとおり原作にはない前言を書いている。「日耳曼帝国創立の大黒柱、鉄公ビスマルクは二たび死したり。其個人的生命は本年(注:1898)八月に於て。政治的寿命は明治廿三年(注:1890)日耳曼首相を辞してフリドリツシユルーヘーに退隠したるの時に於て(後略)」(7頁)。羅普漢訳はそれを漢訳しなか

った。『外交報』の不記は蘆花前言を基本的に漢訳するからその点で異なる。

ビスマルク辞任の裏にはフランス人大使(物語る本人)の活躍があった。それがアップワード原作の構造だ。

普仏戦争勝利後にビスマルクはフランスからの復讐を強く警戒した。彼が画策したのは独仏秘密条約を結ぶことだ。ドイツはアルザスとロレーヌを併合し、フランスはエジプトをイギリスから奪うという内容。ビスマルクはフランスと不仲なイギリスを自陣に引き入れようとした。それがフランス抑制にどのような効果があるのか一見わかりにくい。当事者であるイギリス大使が本篇の話し手に次のような暴露をした。

【原作】 Prince Bismarck has informed our ambassador in Berlin that he will accept your proposal unless England accedes to the Triple Alliance within a week from today, and undertakes to employ her navy in a blockade of the French coast as soon as war is declared. p.105

ビスマルク公はベルリンのわが国大使に、本日から1週間以内にイギリスが三国同盟に加盟し、宣戦布告と同時にフランス沿岸の封鎖に海軍を導入しない限り、そちらの提案を受け入れると通告しました。

「わが国大使」とはイギリス大使を指す。「そちらの提案」とはフランスから提案されたことを意味する。イギリス大使は独仏密約がフランスからビスマルクへ提案されたものと説明している。すなわちイギリスを排除する独仏密約が嫌ならばイギリスはフランスを攻撃しなければならないという内容だ。

ビスマルクは独仏密約をちらつかせてイギリスを脅迫しフランスを滅亡させようたくらんだ。ビスマルクならばやりかねない。そういう想定でアップワードは小説を構想した。蘆花は

「不埒千萬な両面使ひの卑斯馬克」(14頁)と加筆して説明した。当たっている。

【蘆花】で、若し英国の方で今日から一週間に三国同盟に加入して、いざ戦争と云ふ場合には、英国の海軍を以て仏蘭西沿岸を封鎖すると云ふ約定をしなければ、不肖卑斯馬克は是非なく仏国政府の申込を許諾する積りだ、と斯う申込んで来た次第です。14頁

「いざ戦争と云ふ場合には」という日訳は間違いではない。しかし少し疑問がある。蘆花の訳しているように原作は「本日から1週間以内に」と時間を限っている。それに続けて「いざ戦争と云ふ場合には」と仮定の話にしてしまうと緊迫感が薄れる。イギリスは三国同盟に加入、即宣戦布告をしなければならない。そう訳してこそ原作に忠実になる。

羅普の漢訳を見る。

【羅普】若英国不於七日之内。加入三国同盟。相約有事之時。英国願以海軍封鎖法国沿岸。則余不肖将不能不従法国政府之請矣。俾斯麦所言如是。62頁

もし英国が7日以内に三国同盟に加入し有事の時には英国が海軍でフランス沿岸を封鎖すると約束しないならば、不肖私はフランス政府の要請に従わざるをえない、とビスマルクはそう言うのです。

この部分について羅普漢訳は蘆花を直訳している。原作から離れるのはしかたがない。

フランス人大使が外交の現場で遭遇した体験談をイギリス人の青年に話して聞かせる。これがアップワード原作の基本だ。下線部を見てほしい。

【原作】“You, my friend, are well aware

that I do not share in the general feeling of my fellow-countrymen towards Great Britain. On the contrary, I lament the hatred with which your nation has pursued us ever since their defeat at Waterloo.”/“Defeat, M. l’Ambassadeur?” I ventured to interject. / “Defeat, without doubt,” returned his Excellency, with firmness. “Do you pretend that, if the Prussians had not arrived, a single one of your countrymen would have been left alive?” / I preferred to waive this discussion. / “It is this recollection, so galling to a brave people, that has doubtless prompted the incessant intrigues of your Government against the greatness of France. Fortunately, a Frenchman knows how to be magnanimous in the face of provocation. (後略)” p.102

「私が英国に対する同胞の一般的な感情を共有していないことは君もよくご存知だろう。それどころかワーテルローでの敗北以来、あなた方の国が我々を憎悪の目で見てきたことを私は嘆いている」/「敗北ですか、大使閣下」私はあえて口を挟んだ。/「間違いなく敗北です」と閣下は毅然とした態度で返された。「もしプロイセン軍が来なかったら、君の同胞がひとりでも生き残っていたとでも言うのかね」/私はこの議論を放棄することを望んだ。/「勇敢な国民を苛立たせるこの記憶こそが、フランスの偉大さに対する貴国政府の絶え間ない陰謀を促したに違いないですな。さいわいなことにフランス人は挑発に直面しても大らかに振る舞う術を知っているのだよ。(後略)」

「You, my friend [君、友よ]」と呼びかけたのはフランス人の大使だ。本作品の語り手であ

る。その大使がワーテルローの戦いで敗北したのは英国だという。敗北したのはフランス軍というのが史実だが大使はプロイセン軍の活躍を高く評価しているという態度を明白に示した。大使のイギリス人に対する皮肉である。あくまでもフランスを持ち上げイギリスを見下す。アップワードはそういう設定にしている。

原作は少し持って回った表現だから蘆花はより直接的に書き直した。原作に施した下線部が次の蘆花日訳下線部にほぼ相当する。

【蘆花】主人は卷蕒の灰をほとほと錦手の皿に落して少しく頭をか志げ「一体英仏の間は昔しから兎角悪感があつて、英国もウオトルルーの敗北以来……」/「ウオトルルーが英国の敗北とは?」/「イヤサ英国の敗北に違ひない。其時普魯士[土]巫の援兵が来なかつたとして御覧じろ、英軍は唯の一人も生きて返つた者はありますまい。」  
所でそのウオトルルーの敗北以来は、英人も兎角仏蘭西を悪むし、仏蘭西の方でも善ひ心地はしない。併し僕は一風違つて更に英国を嫌はなひ。(後略)」11-12頁

「主人は卷蕒の灰をほとほと錦手の皿に落して少しく頭をか志げ」は蘆花の加筆であって原作にはない。ここの「主人」は「大使」の意味に使っている。原文と照らし合わせると蘆花が物語の大筋をとらえて細かな部分を省略したことがわかる。ただし大使と青年の会話がある個所は残した。ふたりの語りであることは明確に理解できる。日本の読者のためにわかりやすく書き換えていることも明白だ。

原作の説明を削除したといえれば本作の冒頭部分がある。大使と青年はサルドウ (Sardou) の戯曲をコメディ・フランセーズで見ることからはじまる。ふたりの会話は劇場内でなされているが蘆花はそれをすべて省略した。

羅普はといえば本作を漢訳するにあたり、人

物ふたりの対話という小説の基本構造を無視した。「余」が一人称で話すのみ(別作品では異なる)。原作と蘆花に出てくる聞き手は存在しない。

【羅普】英法邦交。向來不睦。自滑鉄廬之役以來。英人固不喜仏蘭西。而法人亦惡英吉利。惟余與衆略異。余生平不甚惡英人。

61頁

イギリスとフランスの国交は昔から不仲であった。ウオトルルーの戦いよりイギリス人はもとよりフランスを好まず、またフランス人もイギリスを憎んだ。ただ私は皆とは少し違って生まれてこのかたそれほどイギリス人を憎みはしなかった。

蘆花は原作を簡潔化しさらに書き換えた。羅普はそれを一層圧縮している。漢訳はほぼ骨格だけを示しているのがわかる。

ビスマルクの陰謀からフランスを救うための方法はひとつだけだ。すでに彼の手中にある独仏秘密条約を奪い返すしかない。こうして大使は行動を開始する。

フランス外務大臣自筆の文書を持ってベルリン(柏林)へ行く。

【原作】Then he wrote the letter at my dictation, and also another document which I thought it well to have in reserve. Armed with these papers, I left him. p.108

そして彼は私の口述で手紙を書き、さらにもう1通予備として持っておいた方がいいと私が思った書類を書いた。それらの文書を持って私は彼のもとを去った。

【蘆花】それから僕は外務卿の添書と、今一ツ不時の用に文書一通携帯して、直ぐ伯林へ出発した。17頁

【羅普】余於是携封書赴柏林。64頁

それから私は手紙を携えてベルリンに赴

いた。

原作の「彼」はフランス外務大臣、「私」は本作主人公の大使を指す。大使が持ったのは手紙(蘆花のいう添書)と1通の予備文書「another document which I thought it well to have in reserve.」(p.108)だ。内容を明かさないう文書があることをさりげなく述べている。

注目されたい。紹介の手紙と内容を説明しない文書の2種類がある。大事なのはもうひとつの文書の方だ。アップワードが「予備として」と記述したのは目立たないようにする工夫にはかならない。蘆花は「今一ツ不時の用に文書一通」と正しく翻訳している。これが重要書類だ。結論を言ってしまうと独仏秘密条約に見せかけた別内容の文書なのである。これを明らかにすれば物語上の仕掛けが露見するからアップワードはわざと曖昧に書いた。存在そのものを隠すことは小説作法上できないからほめかすしかない。

大使は独仏秘密条約を取り戻すだけで終わらせるつもりがなかった。仕上げの意味がその文書に込められている。アップワードは隠す方向で記述した。本作の伏線だからだ。最後にそれを回収して物語が終了するという段取りである。

ところが羅普が漢訳したのは片方の手紙だけだ。「封書[手紙]」という漢訳は、ベルリン駐在のフランス大使に面会するために使用される紹介状を指す。蘆花の「今一ツ不時の用に文書一通」は重要ではないと羅普は考えて漢訳しなかった。羅普の漢訳はもとから簡略化する傾向がある。しかしアップワードが仕掛け蘆花が引き継いだ伏線を見逃したとすれば不注意だった。把握が不足しているといわざるをえない。

ビスマルクは重要書類については特別厳重に管理している。首相官邸の金庫には収めない。

「a certain yellow dispatch-box/黄色な手箱/一黄色手盒」(p.116/23頁/68頁)に入れて肌身離さず携帯しているのを大使は知っていた。



dispatch-box とは鍵つき公文書箱のこと。大使は以前にビスマルクが使用しているのを見たことがある。独仏秘密条約文書はそれに保管されているに違いない。

大使は旧知のドイツ皇帝ヴィルヘルム2世の協力を得てビスマルクを呼び出してもらった。大使は隠れて様子を窺う。皇帝はビスマルクにロシアとの通商条約を見せると命じる。文書箱の鍵を開けさせるのが目的だ。ビスマルクは解錠した。それを見届けた皇帝はいやがるビスマルクを2階に引き立てる。大使の出番だ。

大使が独仏秘密条約を抜き出し別文書に入れ替える部分を紹介しよう。

【原作】 The instant the door closed behind them, I darted from my hiding-place and pounced on the yellow box. There, lying close to the top, was an envelope bearing the French official seal, and torn open at the end. I snatched it up, and the next moment the fatal document was in my hand. (中略) I had swiftly crumpled the all-important document into one pocket, while from another I drew a paper similar in appearance, and coolly slipped it into the envelope, which I restored to the dispatch-box under his very eyes. pp.118-119

彼らの背後でドアが閉まった瞬間、私は隠れ場所から飛び出し黄色い箱に飛びついた。そこにはフランスの公印が押され端が破れている封筒があった。私はそれを拾い上げると、その瞬間に運命を決する文書は私の手の中になりました。(中略) 私はそのもっとも重要な書類を素早くクシャクシャにしてポケットに入れ、一方で別のポケットから似たような文書を取り出し封筒の中に静かに入れて、彼(注:皇帝)の目の前で文書箱に戻しました。

【蘆花】カタンと戸がしまると、僕は隠れ所から飛び出して例の黄色の手箱を引つかむのです。箱の内を見ると、直ぐ眼についたのが、仏国外務省の印を捺した大きな封筒で、上の方は引裂ひてある。此だ。引つかむ。モウしめた。仏国の存亡に関する一大事の書類は、まんまと僕が手に入つたです。(中略)僕は例の大事な文書を衣兜(ぼつけつと)につまみ込んで、一方の衣兜から一見同じ様な文書を取り出して封筒にさし込み、帝の眼前で手箱の中に入れて直ぐ隠れ場所へ逃げ込む。25-26頁

【羅普】轟然一声。房門忽閉。余乃自密室出。忙開黄色手盒一看。見有一物最先映吾眼簾。則一大封皮盖有法国外務省関防而已経開口者。余自会意。遂即攫之。嗚呼。法国存亡所繫之一封要書。已入余手矣。(中略)而余已此時將此緊要文書。挿入衣袋。更從衣袋内取出一封同様文書。依旧挿入封皮之内。在帝面前放還手盒有内。遂即退還。藏於密室。69-70頁

バタンと戸が閉まると私は隠れ所から出て急いで黄色の手箱を開けて見た。真っ先に私の眼に入ったものはフランス外務省の公印が捺してある大きな封筒で、すでに封が切つてある。私にはわかった。すぐにつかんだ。ああ、フランスの存亡がかかった重要文書は私の手に入ったのだ。(中略)そうして私はこの重要文書をポケットに押し込むと、さらにポケットから同様の文書を取り出してもとどおり封筒に差し込み、皇帝の目前で手箱に戻して返却すると隠れ所にひそんだ。

本物の独仏秘密条約文書を抜き出しそのかわりに「a paper similar in appearance [似たような文書]」を差し込んだ。これこそ以前に記述していた「another document which I thought it well to have in reserve [もう1通予備として

持っておいた方がいいと私が思った書類] すなわち蘆花が翻訳した「今一ツ不時の用に文書一通」が該当する。大使は最初から本物の文書と別に用意した文書入れ替える考えだった。

この注目点は、両文書ともフランス外務大臣その人が執筆しているところだ。独仏秘密条約文書と別の文書の区別は大使以外には判別できない。もうひとり判別できるのはビスマルクのみ。これが文末のどんでん返しにつながる。種明かしは最後にとってある。アップワードが手間をかけて物語を構築していることがわかる。

羅普はここで「一封同様文書[同様な文書1通]」を唐突に挿し入れた。彼はその文書の存在を前の部分で漢訳していない。読者はどこから湧いて出てきたのかと疑問に思っただろう。上記漢訳は蘆花日訳をそのまま反映している。だからこそ前出の伏線を省略したことが惜しまれる。

羅普漢訳が蘆花をより簡略化しているもう1例を示す。大使は取り戻した独仏秘密条約文書をどう処分したか。

【原作】 I had torn up the paper into a hundred fragments, and had swallowed them every one. p.121

私はその文書をちりぢりに引き裂き、そのひとつひとつを飲み込みました。

【蘆花】馬車の中で僕は例の文書を千条万に引裂いて、一々嚙むで呑むでしまったのですから。30頁

【羅普】在車上已将此文書。帛裂而粉齏之矣。71頁

馬車のなかでその文書を引き裂き細かく砕いた。

羅普は蘆花の「呑むでしまった」を省略した。まさか飲み込むとは考えなかったものか。しかしフランスの未来がかかっている重要文書だ。証拠を完全に消滅させるために大使はそうする

よりしかたがなかった。そこまで切羽詰まっていた様子がよく表現されている個所だ。それを無視しては緊迫感がなくなる。羅普の誤判断である。

ビスマルクはヴィルヘルム2世を前にイギリス大使に向かって三国同盟に加入するかどうかを質問した。イギリス大使はすでに条約文書が存在しないことを知らされている。フランスがイギリスを攻撃する確証をビスマルクに求めた。独仏秘密条約文書を見せると要求したわけだ。彼は黄色の箱を示して確証はこの中にあると言う。ビスマルクが箱から取り出した文書をイギリス大使は読み上げた。

【原作】 ‘——The French Government, after according due consideration to the proposal laid before it on behalf of the German Government, has decided to absolutely decline entering into any such alliance as——’/He had got to there when the overwhelmed Chancellor, uttering a cry of rage, snatched the paper from his hand, and fastened upon its contents, with his eyes starting from his head, and his features wrinkled up in a look of positively ludicrous consternation. p.124

「——フランス政府はドイツ政府を代表して提出された提案を十分に検討した結果、このような同盟を結ぶことを絶対に拒否することを決定した——」/彼がそこまで読むと打ちのめされた首相は激怒の叫び声をあげて彼の手から文書をひったくり頭から両眼を飛び出させるようにしてその内容をじっと見据えたが、彼の顔には明らかに滑稽な驚きの表情でしわが寄っていました。

【蘆花】『——仏蘭西政府ハ日耳曼政府ヨリ申込マレタル提議ニツキテ、熟考ヲ遂ゲタル所、左様ノ同盟ニハ断ジテ加入セザルコトニ決シタレバ——』/此處まで読むと、

卑斯馬克突然怒りの一声を發して、英国大使の持つて居る書付をひつたくり、両眼さながら飛び出でそうな勢で文面にヂツと喰ひ入つたが、見る見る憤然失望悔恨無念驚愕の感満面に渦まいて、可笑くも気の毒にも何と言ひ様もない顔をする。32-33頁

【羅普】仏蘭西政府據日耳曼政府所送来提議。再四商定已決意於此等同盟。断不加入矣。／読至此。俾斯麥怒吼一声。躍然而起。将英国大使所持之文書。狂命一奪。両眼突出。張口將此文書一啖。當時俾公忿怒之色。悔恨之色。驚怪之色。失望之色。一時並頭。真是可笑。又是可憐。73頁

「フランス政府はドイツ政府より申し込まれた提議につきなんども協議した結果そのような同盟には断じて加入しないことを決定した」／ここまで読むとビスマルクは憤怒の一声をあげ飛びあがってイギリス大使が持っている文書をひつたくり両眼を飛び出させて口を開けてその文書を喰らった。その時のビスマルク公爵には忿怒の感情、悔恨の感情、驚愕の感情、失望の感情が一斉に表われでおり本当におかしくも憐れでもあった。

この羅普漢訳は蘆花をよく写しているといふことができる。ただし蘆花の「喰ひ入つた」を見つめたと理解せず「張口將此文書一啖[口を開けてその文書を喰らった]」と誤訳した。

「喰らった」のは語り手の大使が秘密文書入手した時馬車のなかでそれを喰らったとある箇所からの連想かもしれない。どちらにせよ誤解にかわりはない。

ついでだから羅普漢訳には小さな誤植があることを指摘する。ビスマルクが肌身離さず持ち歩いた文書箱に関する描写だ。

【原作】 carrying his eternal yellow dispatch-box under his arm, p.116

永遠の黄色い手箱を小脇に抱えて

【蘆花】卑斯馬克は例の黄色な手箱を小脇にかゝへて 23頁

【羅普】俾公果挾一黄色手盒於膝下。68頁  
ビスマルク公ははたして黄色の手箱を膝下にかかえて

漢訳の「膝下」は明らかに「腋下」の誤植だ。大使が準備して差し替えた別文書はもとの条約とは正反対の内容のものだった。独仏秘密条約文書を葬ったことによりフランスはイギリスから攻撃されるという滅亡の淵から脱け出せた。一方の発案者ビスマルクについていえばそれがそのまま失脚の原因になったという結末である。

## 8 「2 白糸」のばあい

原作題名は「白い糸 [THE WHITE THREAD]」という。漢訳は羅普「白絲線記」。のち『説部腋』収録時に「白絲線」へと改題した。

蘆花は本作でもアップワード原作にはない前言をつける。作品の歴史的背景を解説するためだ。本作のは少し長い。説明すべき事項が多いからだろう。

羅普はこの蘆花前言を漢訳末尾に移動させた。別作2篇では前言を採用しなかったからこれは例外的措置となる。ただし蘆花のままに前言とはしなかった。締めくり部分で作品の歴史的背景を説明することに変更した。

【原作】なし

【蘆花】東欧の伏魔殿はバルカン半島なり。露、奥の勢力は此處に一消一長し、戦国策の奇話、維新前史の惨劇は、常に此處に行はれつゝあり。／其一国セル井アの先王ミラン一世と云ふ。後はナタリーと云ひて、露国近衛隊の大佐クツテコの女なり。王は奥地利に党し、後は露国出身の人ならば、務めて露西亜の利益を計りぬ。争の極、後は千八百八十八年十月を以て離縁放逐せら

れしが、露国は何条之を黙視す可き、終に陰險政略を以て王ミランに迫りて退位せしめ、猶幼稚の太子亜歴山を以てセル井ア王となしたり。是れ明治廿二年三月の事なりき。／「白糸」は此事実によつて結構せるもの。篇中首相スタロ井ツチが暗殺の一条は、去明治廿七年中暗殺せられたるブルガリアの首相スタムブーロツフの事を用ゐたるならん。但「白糸」の「スタロ井ツチ」は向露党なれども、スタムブーロツフは非常の露国排斥家なりき。35-36頁

【羅普】巴爾幹半島。乃東欧之伏魔殿。俄与奥於此争勢力之消長。両不相下。故捭闔縦横之術。往往施用於其間。其中有国曰塞爾維亞。其王曰美蘭。其后曰拿陀利。俄国近衛隊大佐茄士支哥之女。后為俄出。故党於俄。事事務有以利俄。而王則傾心於奥。故兩人常若氷炭。后卒以千八百八十八年十月為王所出。而俄不能黙視。乃卒以陰謀政略迫美蘭王使退位。而擁其幼主亜歴山為王。是西歷一千八百八十九年之事也。此篇実因此事实敷衍而成。惟篇中總理大臣被刺一事。頗屬虚構。似假用千八百九十四年普爾牙利亜首相斯聃布祿之事。惟白糸之斯陀羅支。雖為俄党。而斯聃布祿則排俄者。是不可不知也。57-58頁

バルカン半島は東欧の伏魔殿である。ロシアとオーストリアはここにおいて勢力を争い盛衰し双方ともに引き下がらない。弁舌などの手段を往々にしてここで用いた。セル井アという国がありその王はミラン1世という。後はナタリーといいロシア近衛隊大佐クツテコの女である。後はロシア出身だからロシアを身びいきして事あるごとにロシアの利益をはかった。しかし王はオーストリアを気に入っていた。ゆえに両人は常に氷と炭のように相容れず後はついに1888年10月に王より離縁された。しかしロシアはそれを黙視することができず、つい

に陰謀政略によってミラン王を退位させ幼王アレキサンドルを擁して王とした。1889年の事である。本篇はこの事実を敷衍して成立した。ただ総理大臣が刺された事はまったくの虚構である。たぶん1894年ブルガリア首相スタムブーロツフの事を借用したものであろう。ただ「白糸」のスタロ井ツチはロシア党ではあるが、スタムブーロツフはロシア排斥者であることを知らなくてはならない。

セルビアにおける勢力分布を周知させることが重要だという蘆花の見解である。すなちロシアとオーストリアが勢力争いを繰り返している。セルビア王の「ミラン一世」は親オーストリアであるにもかかわらず「ナタリー」は親ロシアで対立している。ロシアは陰謀政略を用いて王ミランに迫って退位させたのが「明治廿二(1889)年三月」のことだった。本作はこの事実にもとづいている。

アップワード原作はミランとナタリーの名前を書き換えてジョージ「George／国王惹日(ヂヨ[オ]ルジ)／国王」とキャサリン「Catherine／皇后加特琳(カテリン)／皇后」にする。羅普は名前を漢訳していない。

蘆花は前言において原作が言及していない史実を明らかにした。また下線部分の「白糸」は此事実によつて結構せるもの」以下は蘆花の手になる補足だ。

作中のセルビア首相(総理大臣)スタロヴィッチは原作者の創作である。その暗殺はブルガリア首相ステファン・スタンボロフ(Stefan Stambolov, 1854-95)をモデルにしていると蘆花は指摘した。そこはすぐれている。ただしその年は明治27(1894)年ではなく1895年であるらしい。

以上の前言は行き届いた説明だと思う。アップワード原作が史実にもとづいた虚構であることを明らかにしているのがよい。羅普の漢訳は

特に下線部などほぼ蘆花を直訳している。

政治的背景のある朝廷内紛事件だ。王位をめぐる血なまぐさい戦いである。その大筋はいたって明瞭。セルビア朝廷で親ロシア派と親オーストリア派の争いがあった。親オーストリアの国王を排斥しようというロシアの陰謀である。それに大使が巻き込まれて命の危機に見舞われるというのが本篇だ。

冒頭部分を比較対照する。

【原作】“PARDON, M. l'Ambassadeur, but there is a piece of thread on the back of your coat.”/We were about to go forth for a stroll on the boulevards—I had just helped his Excellency on with hi overcoat. p.288

「大使閣下、申し訳ありませんが、外套の背中に糸切れがついています」/私たちは大通りの散歩に出かけようとしていた—閣下が外套を着るのを私がちょうど手伝っていたところだった。

【蘆花】「御待ちなさい、外套の御襟に糸屑が」/我等は共にブルワアルの散歩に出でむとして、今しも大使に外套を打被せたる所なりき。36頁

【羅普】某日余与大使。将赴普路華散等納涼。方出門。余見大使外套襟上有絲屑附焉。因呼大使曰。請君小住。君之外套有絲屑。39頁

ある日、私は大使とブルワアルへ登って涼もうとドアを出たところだった。私は大使の外套の襟に糸屑がついているのを見つけたから大使に声をかけた。「すこしお待ちください。外套に糸屑がついています」

アップワード原作の「the back of your coat [外套の背中]」を蘆花は「外套の御襟」と訳した。場所が違う。ここは原作のままにすべきだ個所だ。大使の命にかかわっている。襟につ

いた白い糸ならば自分で気づくこともあろう。

しかし外套の背中にあるとなると本人には見えない。他人から着せかけられているからなおさらだ。ゆえに背中なのである。殺人の目印に使われている(後述)。

蘆花のいう「ブルワアル」は大通りという普通名詞だ。それを羅普は地名だと勘違いした。もしかしたら高みにある場所と考えたか。それで「散等」という階段を登る意味の単語を使用したのかもしれない。蘆花が「散歩」としているのだから普通に「散歩」を使用すればいい個所である。また外套を着ているのに「納涼」と加筆するのも不可解だ。季節が合わない。それら以外に羅普は前後を入れ替えて漢訳した。蘆花の「今しも大使に外套を打被せたる所なりき」は省略する。

羅普は蘆花日訳の大筋は把握している。しかし圧縮しており細かい部分がずれているのが目につく。

大使は糸屑と聞いて震え上がった。過去において命の危機に遭遇したことがある。それを話そう。こうして大使の物語がはじまる。

羅普はその前に独自の語句を挿入する。「歲月不居。風雲百変。追懷陳迹。良用慨然 [歲月は止まらず複雑に激しく変化する。昔の事を思い出し非常に深い感動を覚える]」(39頁)。「良用」は「とても」という意味の副詞用法。大使が回想するのに羅普は反応した。知識人として自然に言葉が湧いてくるらしい。漢訳するには自由に書き加えることが許容されていると考えている。

大使(当時は代理公使 *Chargé d'Affaires*)が欧州東南の某国(セルビアの名前はださない)に赴任した時のことだ。蘆花前言にあるとおり国内は親ロシアと親オーストリアに分かれて争っていた。ここにロシア公使ドウレンスキー男爵「Baron Dourenski/ズレンスキー男爵/朱連喜男爵」(p.291/38頁/40頁)が登場する。ロシア公使は所用のため帰国するから代理をつ

とめてほしい、と言ってきた。これが畏だった。

首相スタロヴィッチはロシアから賄賂をつかまされている親ロシア派の人間として設定されている。宴会に出席すると首相からロシア大使に渡してほしいと書類を手渡された。これが密計のひとつだ。

宴会後にその首相が殺された。首相の外套を大使が仔細に点検すると白い糸がついている。最終的にはロシア公使の陰謀に引っ掛かった国王の命令であることがわかるのだ。それにより国王は退位する。

題名の出どころだから白糸に注目する。首相が暗殺される前に同じことがあった。大使の外套の背中に白い糸が結びつけられていた。後から気づいたがまさに首相と同じ個所だ。その場面を比較対照する。破線部分(筆者)は蘆花日訳では省略されている。

【原作】“In the vestibule of the Palace I paused to put on an overcoat. It was a cold night, one of those nights in that part of the world which remind one of Ovid's description of the frozen Danube—doubtless you are familiar with the lines?” (中略) / “As I was drawing on my overcoat,” he continued, “the equerry who had followed me made the remark—almost in the same words which you have used this evening:” / “Pardon, Baron, but there is a white thread on the back of your coat.” / “I thanked him, and turned the coat over to look for it. On the back I found a long piece of cotton. It was ordinary enough in appearance, but when I took hold of one end to remove it, I found to my surprise that it was firmly attached to the material of the coat. p.301

「宮殿の玄関で私は外套を着るために立ち止まりました。それは寒い夜でした。凍

ったドナウ川についてのオウィディウスの描写を思い出させる世界のそんな夜でした。 間違いなく君はその詩をよく知っていますよね」(中略) / 「外套を羽織っているとき」と彼は続けた。「私についてきた侍従がこんなことを言いました—君が今晚使ったのとはほぼ同じ言葉だった。「申し訳ありませんが、閣下、外套の背中に白い糸がついています」私は彼に礼を言い外套を裏返してそれを探した。背中に長い木綿の切れ端があるのを見つけました。見た目は何の変哲もないものだったが、取り除こうと片方の端をつかんでみると驚いたことに外套の生地にしつかりとくっついている。

オウィディウス(Publius Ovidius Naso)は紀元前後のローマの詩人。「凍ったドナウ川」という語句で有名らしい。上文の「中略」部分は聞き手が大使に向かって、その詩については忘れてしまいました、などと答える内容だ。蘆花はローマ詩人を含めて関連個所を削除した。あとはほぼ原作どおりに翻訳している。以下のとおり。

【蘆花】寒ひ晩でした。宮中の廊下へ出て、外套を着やうとすると、跟いて来た侍従が、恰ど先刻君が云はれた様に『御待ちなさい。外套の襟に白い糸が』と言ふのです。礼言ツて、外套を打かえして見ると、成程背(うしろ)の所に長い木綿糸がついて居る。別に不思議な事もないが、取つて棄てやうとすると、しつかり結びついて居て一寸も離れない。46-47頁

蘆花は「外套の襟」になぜだかこだわった。原文は「an overcoat [外套]」であって襟はもとから出てこない。上の日訳でははじめに「外套の襟」と出して次に「背(うしろ)の所」と書き換えた。ここは最初から背中とすべき個所

である。「外套を打かえして見ると」なのだから襟であるはずがない。勘違いだと思う。

羅普漢訳を引用する。

【羅普】是晚天氣頗寒。及至廊下。方穿外套。跟來侍者忽向余語。請少住。外套有白絲。正與君今時所言無異。余謝之。反外套一視。見背上果有長絲線繫焉。當時不以為怪。急除去之。而牢不可拔。46頁

その晩の天気はとても寒かった。廊下へでて外套を着ようとするにつれてきた侍従がふと私に語りかけた。「すこしお待ちください。外套に白い糸がついています」私は札を言って外套をひっくり返して見るとはたして背中に長い糸がつながっている。その時は不思議にも思わなかったから急いで取り除こうとしたが堅固で抜くことができない。

羅普は「外套有白絲 [外套に白い糸がついています]」とする。蘆花日訳の「襟」を無視した。前後の文脈から判断したものだろう。それは正しい。羅普は冒頭部分で「外套襟上有絲屑 [外套の襟に糸屑]」と「外套有絲屑 [外套に糸屑]」の2種に漢訳している。蘆花の訳文を忠実に漢訳した。しかし羅普は正しく理解していたのだからそこも一致させておけばよかったのと思う。

暗殺された首相の外套に結ばれた白い糸だ。大使の外套にも同じ個所に白糸がつけられていた。自分の生命が狙われていると気づいた大使はウィーンから鎖帷子「one of those shirts composed of steel links [鋼の環で作られたシャツのひとつ] / 鎖帷子 / 護身網衫 [護身の網シャツ]」(p.308/53頁/49頁)を取り寄せた。

鎖帷子は英語で chain armor、chain mail などという。アップワードはその単語を使用せず代わりに説明した(ただし p.312で mail shirt と記述する)。蘆花は鎖帷子 1語で適切に

日訳しているのがよい。

羅普は「護身網衫 [護身の網シャツ]」だ。漢語では「鎖(子)鎧」「鎖子甲」などがある。しかしそれは使わなかった。蘆花日訳にある「此鎖帷子は襪衣に丈夫な鋼鉄の鎖を仕込むだもので」を漢訳した。すなわち「此種網衫。乃用鉄網編成。以之代衫 [この網シャツは鋼で編んでありシャツのかわりとする]」だ。日本語「鎖帷子」に漢語「網衫」を当てた。ところが羅普はすこし後で「鉄網衣」(51頁)を出している。蘆花は一貫して鎖帷子を使っているのだ。羅普がなぜ鉄網衣で統一しなかったのかと疑う。

大使は首相の葬儀に参加する。それを予知していたらしい暗殺者は大使の外套の同じ場所に白い糸を結び付けていた。鎖帷子を着て備えた。大使が襲われる場面を見る。

葬儀が終了し大使は武官を伴なって徒歩で公使館にもどる途中だ。待ち構えていたのは首相暗殺の時にも見かけた片目で足の不自由(跛行)な物乞いである。

【原作】 I can hardly describe how the rest happened. I felt something strike me violently in the back, then came a crash of splintered steel, an oath, and a loud cry in Montalembert's voice as he came running up from the rear. Leaving him to deal with the ruffian behind me, I sprang forward and clutched the one in front. / As I had anticipated, his lameness was a feint. Instead, I found myself engaged with an active powerful man, who let fall his crutches, and struggled so desperately in my grasp that it was all I could do to prevent his escape till Montalembert came to my assistance. p.315

あとはどうなったのか、うまく説明できません。何か私の背中を激しく打つのを感じました。そしてガチャと鋼鉄が砕ける

音、罵り声、後方から駆け寄ってきたモンタランベールの叫び声が響いた。彼に後ろの暴漢を任せて、私は前の奴をつかんだ。／予想通りこいつの跛行は偽物だった。その代わりに、私は活動的で強力な奴と戦っていることに気づいた。奴は松葉杖を落として私の手の中で必死にもがくので、モンタランベールが助けに来るまで奴の逃走を阻止するのが精いっぱいだった。

【蘆花】さあ其れから後は何が何やら一切夢中でした。何ものか烈しく僕の背を突く。着込むだ鎖帷子に當つてガチャンと火花が出る。匕首が折れる。罵る。僕の武官が大喝一声駈けつける。実に二三秒間の騒ぎです。／後の奴は武官に任かして、僕は飛びかゝつて前の奴を引攪むと、果して此奴偽跛者で、撞木杖を落して逃げにかゝる。逃すまいと引きとめる。此奴中々の大力で、非常に掙扎(もが)くので、僕は懸命の力を出してヤツと引きとめて居る。58-59頁

【羅普】自此之後。則余昏昏然。一切情形。如在夢中。不大明瞭矣。大抵有一人以猛力擊余背。而與余所穿之網衣相激。砉然一聲。火光四迸。則匕首折也。而又有人大罵。余之武官。又大喝一聲。隨後趕來。皆此兩三秒間事也。／在余背後之賊。余不暇顧。一任武官某處置。余則飛步上前。纏彼乞丐。果哉。此乞丐原是假扮跛者。乃立棄其杖而逃。余不肯放。竭力牽之。此賊力甚強。幾被擺脫。余出盡平生力僅能制之。53-54頁

それから後のことは私はぼんやりとして一切の状況はまるで夢の中にいるようでそれほどはっきりはしていない。たぶん誰かが私の背を激しく突いたが私が着ていた鎖帷子とぶつかってガチャと音がして火花が飛び散り匕首が折れた。誰かが大いに罵ると私の武官が大声をあげて後ろから追いかけてくる。これは二三秒間のことだった。／私の背後にいる奴にはかまわず武官某に

処置を任せた。私は前に飛び出してあの物乞いをつかんだ。果たしてこの物乞いは跛行に変装した奴ですぐさま杖を捨てて逃げようとする。私は放しはしない。力いっぱい引っぱる。この悪党は力がとても強く逃げられそうになったが私は平素の力を出しつくしてようやく押さえることができた。

モンタランベールは大使に同伴した武官の名前だ。蘆花はその名前をすべて省略して武官に置き換えた。羅普も同様。「火花が出る。匕首が折れる」は蘆花が加筆した。鎖帷子の背中だから火花と匕首が見えるはずがない。臨場感を出すための工夫だろう。細かな違いはある。だが蘆花は大筋を押さえて活劇場面をうまく日訳しているといえる。羅普は蘆花を直訳している。

扮装を剥ぎとれば偽物乞いである。なんと警視總監その人であった。彼が白状した内容のうち羅普が勘違いした個所を示す。小さな部分だ。

先日、外套に白糸がついていたのを知らされた大使はそれを抜き取った。結果として目印がないから命拾いをしたのだ。警視總監は大使自身が白糸を抜いたのを知らない。自然な台詞が出てくる。

【原作】The thread must have come off.  
p.317

糸は外れてしまったのでしょうか。

【蘆花】如何かして絲がとれて志まつたと見えます。60頁

誰が白糸を取ったのかわからないのだから「外れてしまった」という推測になる。蘆花もそうした。

だが、羅普はそれと違って次のように漢訳する。

【羅普】此絲似是由閣下除去者。55頁



あの糸は閣下が取り除いたようですね。

警視總監の考えでは大使が糸を抜いた。それでは暗殺の印であることを大使はあらかじめ知っていたことになる。何気なく取り除いたことで自分の命が助かった。その偶然性があるから始めて成立つ物語だ。警視總監の台詞は小説としてはうまくない。羅普は白糸の取り付け場所を外套の背中だと前後の文脈によって正しく把握した。だがここは読み違えたようだ。

結末はアップワード原作と蘆花日訳では異なる。蘆花は言葉を付けくわえて説明を増やした。その個所に下線を施す(羅普も同様)。

【原作】 But, for the honour of the diplomatic body, I prefer to think that he did not foresee the extreme measures to which Prince George would resort. p.320

しかし外交機関の名誉のために言っておきますが、私はジョージ国王が極端な手段に訴えることを彼は予想していなかった、と考えたいと思います。

【蘆花】併し外交家の躰面から言つても、露公使は、まさか王陛下が最後の手段に訴へやうとは思ひがけなかつたと考へられるです。でなければ、ねエ君、如何に自国に不利益な国王を廢する為めだつて、総理大臣の命ばかりか、怨みも恋もない外国の公使まで犠牲にするなんぞは、随分痛(ひどい)話ですからねエ。 63頁

【羅普】然外交家雖貴用術。而亦不能無所顧慮。余以俄公使必不料国王竟忍施此毒手。故用此計。不然、即謂有益於自己本国。而令人国之総理大臣死於非命。且幾令無嫌無怨之外国公使。亦為此而作犠牲。是可忍孰不可忍。豈非過酷邪。 57頁

しかし外交家は計略を使うことを重んじるとはいえ、行動をためらわないはずがないのです。国王がああ残酷な仕打ちを平然

と行なうのにこの計略を使うとロシア公使はまったく予想しなかった、と私は思います。そうでなければ自国に有益だからといってよその国の総理大臣を横死させるばかりか怨みもない外国公使をも犠牲にするというのは絶対に容認できるものではありません。あまりにもひどいではありませんか。

蘆花は前言でロシアの陰険政略だと書いた。しかし具体的な計画がどういうものであったのかアップワード原作でも明らかにされていない。ロシア公使は国王が暴走するとは予想していなかった。フランス人外交官はそう述べてロシア外交機関に同情的な発言をしている。だがこれは虚言だ。原作者の作文技術である。皮肉だとわかる。

計略があったのは確かだ。親ロシア派の首相がフランス大使(この時点では公使)へ書類を預けたのがそれに該当する。しかし大使の見解では書類の内容は大したものではないという。そうすると秘かに手渡したという行為そのものが秘密計画だったことになる。それが国王に知られることも計算に入れていた。そうして親ロシア派の首相と無関係なフランス人外交官を殺害する命令につながる。ここまでロシア公使は予想していた。これがロシアの陰険計略だ。

事実、結果として暗殺命令を発したセルビア王を退位に追い込んだ。これはロシア公使の手柄になる。アップワードはロシア公使を弁護しているように見せかけてその陰謀の残酷さを示唆した。親ロシア派の首相とフランス人を巻き添えにするだけの価値がその計略にはあったということだ。ロシアは自分の利益になることはなんでもやる。それほど凶悪だった。これが原作の主旨である。

蘆花は原作の幕切れに不十分さを感じたらしい。「極端な手段」だけでは内容が不明だ。そこで末尾に自分自身で加筆のうえ解説した。ロシア公使は、まさか国王が首相とフランス人外

交官の殺人司令を出すとは予想ができなかった、と。これは蘆花による弁解のくり返しだ。重点は「随分痛(ひど)い話ですからねエ」にある。そのひどい事を実行したのがまさにロシアなのだ。残忍冷酷ぶりを強調した。

羅普は蘆花の加筆部分を含めて直訳している。蘆花の「随分痛(ひど)い話ですからねエ」には「豈非過酷邪[あまりにもひどいではありませんか]」を当てて正しい。

## 9 「8 法王殿の墓」のばあい

原作題名は「ヴァチカンの墓 [THE TOMB IN THE VATICAN]」という。漢訳は不記「瑪瑙印」。

カトリック教会の聖地ヴァチカンはローマ教皇によって統治される。日本において以前は法王と称していた。蘆花はその時代の翻訳だ。ただし不記ははじめから教皇と漢訳している。

本作にある蘆花の前言はアップワード原作の253-255頁を要約したものだ。

【原作】 pp.253-255

【蘆花】世界一の小国は、羅馬法王の住むヴァチカン殿なり。／宮殿を指して国とは可笑しき話なれ共、法王殿は儼然たる一の独立国なり。今の伊太利朝廷の興るや、羅馬法王は盡く其領分を削られしが、唯ヴァチカン殿のみは其唯一の版図として残りぬ。朝廷また法を發して其唯一版図の不可冒を認め、法王を其国君と認め、伊太利政府の官吏も法王の許可なくしては殿内に入る能はざるの制を定めたり。然れば小なれ共ヴァチカンは一の独立国、法王は其君主なり。歐洲列国の中、加特力教の關係ある邦国は、大率伊太利朝廷に使節を置くの外、別に法王庁に使節を派す。仏国の如きも亦然るもの。／歴代の法王英豪多し、当代レオ十三世の如き、実に歐洲屈指の人物、八十余歳の老翁にして鏗鏘たること壯年の如し。亦

一の老偉人なり。日耳曼帝の抱負と意気を以てして、猶法王の前に立つては兒童の如く戦慄自から禁ずる能はざりしと伝ふ。

298-299頁

【外交報】なし

ヴァチカンがイタリア政府と敵対している歴史的概要を説明した。それによって人的交流が禁じられていることを明記している。これが物語の背景にある。

大使は聞き手にむけてこの解説を馬車の中で行なった。蘆花はその部分を省略する。アップワード原作は書き出しに撞球場、劇場、チェス競技などを設定しているが蘆花は日訳しない。翻訳しないのが基本になっている。

次代のレオ13世(1810-1903)の名前は原作でも出てくる(p.254)。ただし下線部にあるような記述は原作にはない。蘆花の加筆である。本作の主要人物は「パイアス九世」すなわち教皇ピウス9世(Pope Pius IX。Pio Nono、1792-1878)である。蘆花にレオ13世についての知識があったことはわかる。別作「大使夫人」にも名前が出てくる(340頁)。ただしここでわざわざ書き加えた意図は不明だ。そうしたかったらしい。

蘆花日訳の冒頭部分を示す。

【蘆花】先代の羅馬法王パイアス九世の時、余は仏国公使として法王庁に駐割したることあり。199頁

【外交報】羅馬教皇披士第九在位時、予(割注：借用著者口氣其實假託他)為法国公使、駐節此邦、72期13丁オ

ローマ教皇パイアス9世が在位の時、私(割注：著者の口吻を借用して実は仮託している)はフランス公使としてそこに駐在したことがあった。

蘆花日訳に該当するアップワード原文は見つ

からない。蘆花は前後を勘案して作文した。

不記は漢訳を『外交報』に連載するに際し総合題名を「外交小説」とする。それぞれの作品はいわば章題あつかいだ。単行本にしたばあい『外交小説』を書名にすることができる。蘆花の『外交奇譚』とまったく同じ構成体裁にそろえた。

不記漢訳「瑪瑙印」は『外交報』連載の最初を飾る。ゆえに語り手の「予」について割注をつけた。原作者が小説の主人公フランス大使に扮しているのはそのとおりで。

連載を始めるにあたって不記は全体を説明する「前言」を「瑪瑙印」に置いた。



【外交報】本書原名歐洲朝廷之秘密。蒐述奇聞。都十餘則。係刺取當時實事。而潤色点竄之者。虛耶實耶。読者作小説觀可也。訳文間有増損。期鑒閱者之目而已。72期13丁才

本書は原名を『ヨーロッパ朝廷の秘密』という。奇譚を集めて10余話である。当時の事実を選択し潤色して書き改めたものだ。虚か実か、読者は小説として読めばよい。

訳文には増減をほどこした。読み巧者の目に留まることを期待するのみ。

蘆花「例言」に「一、原書は“Secrets of the Courts of Europe”——Allen Upward」と明記する。不記はそれを「歐洲朝廷之秘密」と漢訳し原作者名については省略した。さらに訳者が独自に変更したとも述べる。

蘆花が「ambassador [大使]」を公使と訳したから不記もそれにならった。それはしかたがない。

このあと蘆花はピウス9世を解説してイタリアと争うその意志の強さを称賛する文章を続けた。それは原作にある。ただし不記漢訳はその個所を大きく削除した。

アップワード原作とほぼ重なる個所は次である。

【原作】 The only thing which embarrassed me in Rome was the necessity which I was under, in my character of ambassador to the Holy See, of strictly avoiding all intercourse with the Court of King Victor Emanuel. p.257

ローマで唯一私を困らせたのは、ローマ教皇庁の大使という立場上、ヴィクトル・エマニュエル国王(注：イタリア国王)の宮廷との交わりを一切避けなければならなかったことです。

【蘆花】 偕も余は仏国公使として羅馬法王庁に勤務し、法王殿下の信任を得て、何一とつ不足もなかりしが、唯一の困難は此身羅馬にありながら伊太利朝廷の人々と一切交通を断たれしことなりけり。200頁

【外交報】 蒙教皇倚信甚篤。意殊自得。惟引以為難者。身居羅馬。而与義大利朝廷諸人。不能不斷絶往來耳。72期13丁才

教皇からはなはだあつい信頼をこうむり自分では得意であった。唯一困ったことは、

わが身はローマにありながらイタリア朝廷の人々とは往来を断たなければならないことだった。

大使が人的交流を禁じられた背景には既述のとおりヴァチカンとイタリア朝廷との歴史的対立がある。蘆花はイタリア国王の名前を省略した。

不記が上で蘆花の「偕も余は仏国公使として羅馬法王庁に勤務し」を漢訳しなかったのは冒頭の記述と重複するからだ。蘆花はその間にピウス9世についての解説文を挿入しているから似た表現が出てくるのも気にしなかった。その違いがある。

そのうちに大使はイタリア人のひとりと知り合った。伯爵グリエルモ・ヴェスカロ「Gulielmo Vescaro／ヴェ[エ]スカロ／費斯迦羅」(p.257／201頁／72期13丁オ)である。

大使と伯爵には共通の嗜好があった。珠玉宝石の類、ことにカメオと彫り込み宝石「cameos and intaglios／古印古牌類／玉石碑印之類」(p.258／201頁／72期13丁ウ)を愛玩することだ。

この宝石が誘拐殺人事件を発生させる。そこに至るまで長い説明が続く。その過程を追体験するのが本作の眼目のひとつだ。

大使はヴァチカン博物館で宝石類を鑑賞することを習慣とした。途中でしばしば伯爵と出会ったから同伴を勧めたが彼は必ず辞退する。何か理由があって教皇を恐れているらしい。これが伏線のひとつだ。

その後、サルヴァティエラ枢機卿「Cardinal Salvatierra／大僧正サルヴァチエラ／大牧師薩法察拉」(p.261／203頁／72期13丁ウ)から新しく宝物が献上されたというので見せてもらった。その中の逸品は次のとおり。

【原作】 They were indeed priceless. One in particular, an onyx engraved with the

head of Vespasian, was one of those objects for the sake of which one commits murders! p.262

実に値段のつけようもないものだった。

ローマ皇帝ウェスパシアヌスの頭部を彫刻したオニキス(注:縞めのう)は殺人を犯すためにあるような品物のひとつでした。

p.262

【蘆花】 実に至貴至宝価なきものとは此事にて、中にも蜂頭を刻したる瑪瑙の印の如きは、之を得むが為めには人殺しをもなしかねまじき代物なり。204頁

【外交報】 中有一印。製以瑪瑙。中刻蜂頭。鬚細於縷。眼微於塵。而位置分明。姿態活動。竟為鬼斧神工所莫及。予生平遇珍宝雖多。從未見精巧速此者。72期13丁オ

その中の印のひとつは瑪瑙で作られ蜂の頭部が彫られている。ヒゲは糸よりも細く、目は塵よりも小さい。しかもあるべき場所をはっきりしておりその姿は活動的であってまさに鬼神ですら及ばないでさ。私は生まれてこのかた珍しい宝物に多く巡り合ってきたがこれにおよぶ精巧なものは見たことがなかった。

印章についての説明はアップワード原作と蘆花日訳は異なる。ローマ皇帝ウェスパシアヌスの名前を出しても日本人には理解できそうにない。蘆花はそれを蜂頭に書き換えた。すると不記はそれを受け入れ、さらに鬚、眼、位置、姿態について加筆した。それも4文字に合わせるという凝り方だ。不記の教養が自然とそうさせるのだろう。

サルヴァティエラも伯爵にオニキス(蘆花:瑪瑙の印)を見てもらいたいと大使にことづける。それはヴァチカンが用意した罠なのだ。蘆花が記した「瑪瑙の印」が不記漢訳の題名になった。

伯爵は古印をはなはだしく愛好する。一方で

品性は下劣であることを伯爵夫人の高潔さと比べる個所がある。不記漢訳の書き換えを見るために引用する。大使が伯爵夫人と懇意になったあとの感想だ。伯爵の人となりについて聞き手に説明する。

【原作】 By this time I had learned something of his base character from his injured wife. He was unworthy of that noble woman, whom he would have sold for the worst of Salvatierra's seals. p.265

この時までには私は痛めつけられた彼の妻から彼の基本的な性格についてある程度学びました。彼はあの高貴な女性にふさわしくなく、サルヴァティエラの印章のなかの最悪のもののために彼女を売ったでしょう。

【蘆花】余も夫人と懇意になるにつれて、色々内幕の物語を聞き、伯爵の人物の実に卑しくして到底彼高潔なる夫人の匹にあらざることを知りたり。彼は夫人を待つ実に浅猿（あさま）しく、余は思ふ彼古印の中最劣等の一顆をだに与ふと言はゞ、彼は喜んで夫人を売りたるならむと。205頁

蘆花は原文にない「彼は夫人を待つ実に浅猿しく、余は思ふ」を補った。大使が自分の感想を述べている。日本の読者はよく理解できたはずだ。

大使は伯爵家に赴き帰って来た伯爵に瑪瑙の印について物語った。それを聞いた伯爵は恍惚自失となりヴァチカンへ行くことを約束した。その後の不記漢訳だ。

【外交報】予言古印有較劣者一。擬以婦君。伯爵聞言狂喜。曰。使予得之。雖鬻妻亦何辭。予之是始覺伯爵為人卑陋。遠不及其妻之高潔。且知其待妻之情甚薄也。72期14丁ウ

古印に少し劣ったものがひとつあるから

君の物になるのではないか、と私は言った。伯爵はそれを聞くと狂喜して「私のものになるのであれば妻を売るとしてもどうして断わることがありましようか」と言った。私はそれで伯爵の人となりが卑劣でありその妻の高潔には遠くおよばないとはじめて気づいた。さらに妻を待遇する気持ちがはなはだ薄いことを知ったのだ。

改変のひとつ。不記は妻を売る云々を伯爵が実際に発言したことに強引に置き換えた。蘆花日訳は「余は思ふ彼古印の中最劣等の一顆をだに与ふと言はゞ」（傍点筆者）である。「余」すなわち大使が話してその内容は仮定文だ。しかし不記はそれを無視した。

そのふたつ。大使、伯爵とその夫人の3名がいる場所での会話にした。夫人を前にして伯爵にあえてそう言わせて伯爵が夫人に対して薄情であることを強調したことになる。不記はやり過ぎた（後述）。

問題は不記の日本語理解にはないだろう。上記部分から不記の翻訳姿勢がうかがえるという意味だ。

蘆花は誤解のないように日訳している。不記はその日訳を踏まえながら組み替え書き直して上の漢訳にした。そうする方が伯爵の妻に対する薄情さを際立たせることができるという認識がうかがえる。底本に従ってはいるが部分では自由に書き換える。それが許されていると不記は認識しているのだ。

大使は伯爵から同道することを固く約束させられて博物館へ赴いた。伯爵はオニキスの観察に夢中だ。大使は偽物だ「this is a forgery! / 此は贗物に候 / 此贗鼎耳」（p.268 / 207頁 / 72期14丁ウ）と言う伯爵の声を聞いた。そうしてサルヴァティエラは伯爵がオニキスを持って行ったと話した。伯爵はそのまま行方不明になる。

その後の展開はまことに意外なものだ。

大使が伯爵夫人と相談しているとき伯爵から

遺言書が届く。警察は謀殺の疑いで捜査をしていたが伯爵の消息はわからない。ところが探索を突然やめてしまった。こうして大使が探偵の役割をはたすことになる。どの作品でも大使が主人公として活躍するのがアップワード原作の基本的な作り方なのだ。

大使は推理した。ヴァチカンには伯爵を仇としている怨敵がおり、誘い出すために大使を利用したのではないか。大使に問題解決の手がかりを与えたのは伯爵が持ち帰ったといわれるオニキスが博物館の元の場所に置いてあったことである。それができるのはサルヴァティエラを除いてはいない。

大使がつかんだ重要な手がかりについて不記が漢訳していないことを指摘する。

【原作】 I went straight to the case containing the Salvatierra collection. My first glance at its contents made me turn pale. There, reposing in a place of honour in the centre of the other gems, was the onyx engraved with the profile of Vespasian! p.275

私はサルヴァティエラのコレクションが入っているケースに直行しました。その中身を一目見て私は青ざめた。そこにはヴェスパシアヌスの横顔が刻まれたオニキスがほかの宝石の真ん中に誉れ高く鎮座していたのです！

【蘆花】(前略) 彼長廊に至り、大僧正の宝石を列ねたる件の箱に近寄りぬ。余は一目して真蒼くなりぬ。幾多の宝石の真中に、晃々として輝やくは、まさしく伯爵が持ち去りしと聞へたる蜂頭瑪瑙の印ならむとは。214頁

【外交報】 爰潜蹤至博物院。至是始恍然於前之反覆猜疑。77期10丁オ

そこでひそかに博物館へ行った。そこではじめて以前にくり返した疑いにはたと思

いいたった。

あるはずのないオキニスが目の前に置いてある。これが事件解決の手がかりである。本篇は探偵小説なのだ。不記はその肝心部分を省略してしまった。漢訳としては誤りだ。

大使がヴァチカン墓地に入ると新しい墓がある(これが原作の題名)。見れば伯爵のものであった。大使はオキニスをめぐる伯爵殺害について自分の考えをサルヴァティエラに直接話した。ところが何の反応もない。

ほどなくして大使は教皇に呼ばれた。教皇自身が大使に事件の真相を説明するのだ。

伯爵はもとヴァチカンに勤務する教皇の信頼する将校だった。だが賄賂を受けて敵側のサルデーニャ(イタリア王国の前身)に寝返ったばかりか副官を殺して逃亡した。それ以来ヴァチカンから死刑命令が出ていた。伯爵がヴァチカン領内に入ってくるまで処刑は延期されていたにすぎない。先日、その伯爵がオニキスに引かれて境内の博物館に入ってきた。ただちに捕縛し弁護士をつけて裁判にかけると伯爵は罪を認めたから処刑となった。大使は伯爵逮捕に協力したというので教皇から勲章を授与された。

大使は知らなかったとはいえ共通の趣味を持つ知人を死なせる手伝いをした。かならずしも後味のよい物語ではない。そこをいくらか緩和するためには伯爵が人として下劣きままることを強調する必要があった。死刑にされて当然の悪人であることを印象づけるのだ。不記の伯爵に関する既述の漢訳は蘆花日訳とは違っている。伯爵の下劣さを強調したものとなっている。筆者は書き過ぎだとのべた。そうではあるが見方を変えれば、不記の漢訳は正しい理解にもとづいた書き換えであったということも可能だ。

最後に不記の誤訳を示す。大使は物語の結末をつぎのように締めくくった。

【原作】 By-the by, if we should meet my

wife, be careful not to make any reference to the Countess Vescaro. p.287

ところで、もし妻と会うことになったら、ヴェスカロ伯爵夫人のことには一切言及しないように注意してくれたまえ。

【蘆花】猶又余事ながら荆妻に会ひ玉はゞ、必らずヴェスカロ伯爵夫人の事をな言ひ玉ひそ。225頁

【外交報】僕更有一語囑君。他日得見荆妻。幸以伯爵夫人之事告之。77期12丁オ

私は君にもうひとつ言っておきたいことがある。他日妻に会うことがあったら、なにとぞ伯爵夫人のことを話してくれたまえ。

大使は聞き手に向かって伯爵夫人が高潔であることをほめたことがある。それを妻が聞けば余計な疑惑を抱くかもしれないと気を回した。だから聞き手に伯爵夫人のことは言わないように要請したのだ。蘆花は「な言ひ玉ひそ」と穏やかな禁止で表現している。不記はその表記が理解できなかったようだ。下線部のように「告之[話す]」と反対方向に誤訳した。

## 10 「9 一億万法（一億万法の賭博）」のばあい

原作題名は「ディズレーリ氏の裏切り [THE PERFDY OF MONSIEUR DISRAELI]」という。漢訳は不記「埃及妃」。

スエズ運河株式の約半数が売りに出された。フランスとイギリスが水面下で買収合戦をくり広げる。その内幕話だ。

題名が三者三様で分かれる。どの部分に焦点を当てるかで題名が違う。

アップワード原作はイギリスの立役者ディズレーリ首相を前面に出した。フランスとの競合者である。大使はイギリス首相からの「裏切り」を重視した。蘆花が日訳題名を「一億万法」としたのはフランスが買収のために用意した資金が1億フランであることによる（億万の万には

意味がない）。不記の「埃及妃」は「エジプト妃」だが実は後宮の美女（女奴隷）を指す。大使の活動に協力した。

原作はイギリス首相を、蘆花は株式購入金額を、不記は女性を小説の重要部分だとする。それぞれの認識の違いを示している。

本作は大使にとっては唯一の失敗談だ。

蘆花前言を見る。不記は下線部分にもとづいて大意を漢訳した。

【原作】なし

【蘆花】英国近代の政治家中、外交技倆の尤も拔群なるは、虞翁（注：グラッドストーン）の勁敵、故ビーコンスフィールド伯ヂズレリー氏に過ぐる者なし。氏が外交事蹟中尤も手際なる一を、蘇士運河会社株の大買占となす。氏が一朝仏国を出しぬきて埃及王の持株十七万六千余株を買占めし以来、欧亜の関門たる蘇士運河が如何に英国の一言によつて左右せられ、埃及に於ける英国の位置が如何に鞏固を加へたるかは、何人も知る所なり。／此一篇は蓋し其裡面の消息を説くもの。事実小説の境界、往々分明を缺くことなからずと雖ども、間に髪を容れざる国際交渉の機微は其一端を覗ふ可く、抑も亦英国首相使臣等が如何に機敏に、狡猾に、果決に、自国の利益を護るかは、略此一篇によつて領するを得可し。／歴史は反復す。三十年前の外交世界は今日の外交世界なり。ビーコンスフィールドの骨は已にウエストミンスターアの土となるも、其継続者は断々として自国の利益を防護しつつあり。／外交の事繁き未だ今日の如き甚しきはあらず。勇断機敏の政府を要するもの、独り英国のみならん哉。226-227頁

【外交報】近代英国外交家。其警敏過人者。実莫如埵士礼立。而争購蘇彝士運河股票一事。尤其運謀之巧者也。茲篇即記其事者。述焉不詳。小説家言。固宜爾爾。然外交之

機. 間不容髮. 亦可藉此以窺見一斑已. 77  
期12丁ウ

近代英国外交家で人よりもはるかに敏感なのは実にデズレーリにしくはない。スエズ運河の株式購入を争った1件でその画策をめぐらして特に巧みだった。本篇はそれを記述する。説明はすなわち詳細ではなく小説家のいうことだからもとよりそれだけのことだ。しかし外交の機微にはきわめて接近している。その一部をうかがうに足りるだろう。

ディズレーリがフランスを出し抜いた。蘆花は前言において本作の結末を漏らしている。読者の楽しみを奪ったに等しい。不記は蘆花前言の一部分を抜いて漢訳した。「埃及王の持株十七万六千余株」を省略する。本文で出てくるからだろう。それ以外にも比較的大幅に捨象した。また政治的部分は無視している。

本作の背景は次のとおり\*4。

1858年、資本金2億フランでスエズ運河会社が設立された。40万株の公募で20万7160株をフランス人が、17万7642株をエジプト政府が引き受けた。残りは諸外国である。

スエズ運河建設については最初からフランスが関係している。一方のイギリスは運河建設に最初は反対していた。しかし完成してみれば利用するのは多くがイギリス船舶だ。イギリスはその利便性を認めた。

エジプトが持ち株を売却しフランスが購入すればスエズ運河はフランスの支配下に収まる。イギリス軍艦の通過を拒否する可能性が出てくる。イギリスとしてはなんとしてでもそれを阻止したい。ディズレーリの出番である。

ド・レセップス (Ferdinand Marie Vicomte de Lesseps, 1805-94。以下レセップス) はスエズ運河会社のフランス株主の代表だった。そこから見れば売りに出されるエジプト株式はフランスが購入するのが自然に思われる。ところ

が実際はイギリスの所有となったのが事実だ。その齟齬にアップワードは注目して本作を構想したのだろう。エジプト王イスマール・パシャ「Ismail Pasha/イスマールパシア/衣士美」とフランスはスエズ運河経営について意見が衝突していた、というのが原作者の説明だ。フランスが経済的に苦しんでいた状況は度外視したのだ。エジプト王は最初から株式の売却先はイギリスに決めていた。アップワードはそう大筋を定めた。

フランスは本篇の主人公である大使を代理人に立てて株式買収工作に従事させる。さらに協力者としてエジプトの美女を配置し、ついには大使とイギリス首相ディズレーリとの直接面談を設定した。

最初から大使の負けは確定的だ。史実にもとづき細部を創作するのがアップワードの小説作法である。結果は事実だとしてもそこにいたるまでの経過をあれこれ工夫して本作を成立させた。エジプト王は大使の申し出た1億フランをいったんは受け入れている。大使は安心していった。ところが突然の新聞報道で勝負に負けたことを知る。話を大きく転換させて読者の注意を引きつける。

本篇冒頭で聞き手は証券取引場の階段を下りてくる大使に出会う。大使の言葉で注目すべき個所は次のとおり。

【原作】 You, who have not taught yourself to associate me with ideas of finance, will perhaps be astonished when I tell you that I was formerly the agent in a transaction which concerned one hundred million francs—that is to say, in your money, four million pounds sterling. It arose in this way: p.323

私が以前、1億フラン——つまり君の金に換算すると4百万ポンドに相当する取引の代理人を務めていたことを話せば、金融



の観念と私を結びつけて考えたことのない君はおそらく驚くだろうね。その取引は次のようにして生まれたのだよ：

いきなり1億フラン=4百万ポンドという数字を出してくる。当時の為替相場による換算だ。その表記を見ただけでフランスとイギリスの対立だということがわかる。大使はその取引の代理人をしていたという。本作の主題だ。説明なしに金額を言ったのは読者の注意を引くためだ。しかし蘆花はその数字を含む部分を翻訳しなかった。後で出てくる数字と同じだと考えたのだろう。

蘆花はアップワード原作の冒頭約2頁は省略して大使の発言からはじめる。

【原作】 In the autumn of the year 1875 I was sent for by M. Buffard, who at that time held the portfolio of Foreign Affairs, to his private residence. On my arrival I found him closeted with M. de Lesseps, that great man to whom France forgives the mistakes of his old age, in consideration of the glory which he shed upon her in the past. p.323

1875年の秋、私は当時外務大臣を務めていたビュファール氏の私邸に招かれました。私が到着すると彼はド・レセップス氏と親しげに話していたのです。フランスは彼が過去においてフランスに与えた栄光を考慮し、老後の過ちを許しています。

当時のフランス外務大臣はルイ・ドゥカス(Louis Decazes) という記録がある。アップワードの記述と違う理由は不明。

レセップスは外交官、実業家。スエズ運河の建設で知られる。晩年はパナマ運河開発に取り組んだが破産、パナマ疑獄事件に巻き込まれて名声を失う。アップワードが「the mistakes of

his old age [老後の過ち]」と書いたのはその事を指すだろう。

原作者はレセップスの同時代人として彼の没落と死去を知っている。ただし物語の時期を1875年と特定しているからこの時点ではパナマ疑獄事件は発生していない。原作者はその矛盾を承知しながら「老後の過ち」にどうしても言及したかったらしい。

アップワード原作には先例がある。「シトロンの親王」[“PRINCE CITRON”] / とりかへ子 / 易児説だ。親王の経歴に作品には登場しない3男のものを部分的に「入れ替え」た(後述)。正確に誤記することをこの場合にもくり返したと考えていい。

蘆花日訳と不記漢訳を示す。

【蘆花】 頃は千八百七十五年の秋なりき、時の(仏国)外務卿ブツファール氏より至急私邸に来る可き由云ひ越したれば、取りあへず赴き見るに、蘇士運河開鑿者として有名なる彼のレツセツプ氏来り居れり。227頁

【外交報】 約在一千八百七十五秋。外務大臣(割注：謂法国)華蒲爾。延予過其宅。既往。則議鑿蘇彝士運河之勒塞普君。亦在座。77期12丁ウ

およそ1875年の秋だった。外務大臣(割注：フランスのこと)ブツファールより私邸に呼ばれて行けば、スエズ運河開削を主張したレツセツプ氏がいた。

蘆花はレセップスの没落について時期的に合致していないと理解していたようだ。その個所を翻訳しなかった。不記の漢訳は蘆花日訳にもとづいている。同じになるのは当然である。

大使が依頼された仕事はエジプトが売り出す予定の17万6千株程を購入することだった。レセップスはスエズ運河会社社長(と原作者は記述する / Chairman of the Company p.325 / 運

河会社々長 228頁／運河公司長 92期10丁オ)  
だからフランスに情報が先にもたらされたのは  
納得できる。また彼はフランスに購入させたが  
っていた。金額は1億フランである。不記は  
「百兆法郎」と表記する。漢語の「(一)兆」  
は百万という意味だ。百兆法郎はそのまま1億  
フランである。

エジプト王との交渉はフランスが先行した。  
王の反応が悪くないことを感じた大使は交渉成  
立を確実なものとするために王の後宮の美女に  
賄賂を贈った。それが東洋諸国に処する方法だ  
と確信していたからだ。

その美女はファティメ「Fatimeh／ファチメ  
ー／法嫡梅」と言う。出番は多くない。関連す  
る1ヵ所だけを引用する。蘆花がどれくらい簡  
潔化したかがわかる。

【原作】 It is sufficient to say that I  
ascertained that great influence was  
wielded over Ismail Pasha by a beautiful  
odalisque in his harem, whose name was  
Fatimeh, and who turned out to possess a  
mania for the jewellery of the Palais Royal.  
The negotiation was attended with some  
risk, on account of the rigorous precautions  
which are observed in guarding the access  
to the apartments of the women of the  
East; nevertheless I succeeded in obtaining  
an interview with the Khedive's adorable  
favourite, with whom I got on marvellously,  
though I have often wondered since how  
she accounted to Ismail for the quantities  
of brooches and earrings which she did not  
scruple to accept from my hand. pp.334-  
335

イスマール・パシャに多大な影響力  
を及ぼしていたのは、彼のハレムにいたフ  
ァティメという名の美しい女奴隷でありま  
した。王宮の宝飾品に目がないことを私が

確認したと言うだけで十分でしょう。東洋  
の女性たちの居室への立ち入りを監視する  
ために厳重に警戒されていたので、交渉は  
ある程度の危険を伴いながら行なわれまし  
た。それにもかかわらず私は見事にケディ  
ーヴ(総督)の愛らしいお気に入りと面会  
することに成功し、彼女とはとても意気投  
合したのです。もっとも私はそれ以来、彼  
女が私の手から受け取ることをためらわな  
かったブローチやイヤリングの数々を彼女  
がどのようにしてイスマールに説明し  
たのか疑問に思うことがよくありました。

【蘆花】イスマールの後宮にファチメーと  
云ふ絶世の美女ありて王の寵を専らにし、  
此美人珠玉の類を嗜むこと狂するが如き由  
を聞き知りぬ。余は色々困難を冒して、首  
尾よく此美人に面会し、耳環、飾針夥しく  
贈りつ、何事も首尾よく運びぬ。236-237  
頁

ハレムの美女が宝飾品を好むことを突き止め  
大使はそこに付け込んだ。蘆花は王と美女の名  
前を拾う。ただし後宮が厳重警戒されている部  
分と美女が入手珠玉の類について王に説明した  
かどうかの疑問は削除した。蘆花による簡略化  
である。余分な部分は省くという考えだ。

不記漢訳を引く。

【外交報】予聞王之後宮。有美人名法嫡梅  
者。擅寵於王。酷嗜珠玉。予因冒万難。曲  
折以晤美人。贈以耳環首飾之属。出全力以  
運動之。92期11丁ウ

私は王の後宮にファチメーという美人が  
いて王の寵愛をほしいままにし珠玉をひど  
く好んでいると聞いた。私は万難を排して  
どうにかその美人に面会し耳飾り装身具の  
類を贈り全力で働きかけた。

不記の漢訳は日訳の大筋を押さえている。

後宮の美女についてはエジプト駐在イギリス公使ウォートン大佐「Warton/ワルトン/華爾敦[瓦爾登]」との経緯がある。ウォートン大佐は先輩風を吹かせて王の寵姫にも面会できると大使にむかって豪語自慢した。実際に会って見ると美女は大使とはすでに懇意の様子を示して大佐の面目は丸つぶれだ。このことを因縁めかして作品結末で再び持ち出す。

大使の動きはウォートン大佐に気づかれた。大佐はすぐさまイギリス本国に電報で報告したらしい。大使の想像をはるかに超える速度でイギリスはエジプトの持ち株買収に動いた。その実行者が首相ディズレーリだ。蘆花が前言で述べた「抑も亦英国首相使臣等が如何に機敏に、狡獪に、果決に、自国の利益を護るかは、略此一篇によつて領するを得可し」の実例をまさにここで示したのだった。

大使としてはエジプト王からの承諾をすでに得ている。1億フランの着金を待つだけだった。ところがイギリスから横槍が入って計画は頓挫したと知らされパリに呼び戻された。その命令はロンドンのディズレーリ首相に会って事情説明をしろという。スエズ運河持ち株買収はフランスの私立会社が主導しておりフランス政府は無関係だと強調した。私立会社は利益を求めており政治情勢には無頓着だという説明である。

いうまでもなく大使によるディズレーリへの説得は意味がない。もともとエジプト王はイギリスへの売却を決めているからだ。またディズレーリはすでに即時購入を実行していた。知らぬ顔をして大使と面談している。真相は背後に押しやっっているいろいろと書き込むのがアップワードの小説作法だ。

新聞『タイムズ』はディズレーリの手柄としてイギリス政府がスエズ運河会社の株式を4百万ポンドで購入したことを報じた。大使の完敗である。

大使は聞き手に後宮の美女についての思いを語る。

【原作】“After all, it was poor Fatimeh who came off the worst,” he remarked in a mournful tone, as we returned past the Bourse. “She did not live long to enjoy the little gifts which I had presented to her.” / “How? Do you mean to say—” / “Her fate has remained a mystery. But I have always feared that it was a question of the bowstring—and that Colonel Warton stooped to obtain this diabolical revenge!” p.352

「結局のところ、一番ひどい目にあつたのは哀れなファティメでした」と私たちが証券取引所を通り過ぎて戻る途中、彼は悲しそうな口調で言った。「彼女は、私が贈ったささやかな贈り物を楽しむほど長くは生きられなかった」 / 「どういう意味ですか？ つまり——」 / 「彼女の運命は謎のままです。しかしそれは絞殺の疑いがあるのではないか、そしてウォートン大佐がこの極悪非道な復讐を遂げるために身を落としたのではないかと私はいつも思っていました！」

直訳すれば「弓弦の疑い [a question of the bowstring]」だ。つまり弓弦で絞殺することを意味する。だから「絞殺の疑い」と訳した。後宮の美女は王から見れば大使を手助けするという勝手なふるまいをした。怒った王が美女を絞殺させた可能性もあるだろう。しかし大使はそうなのは大佐が原因だと疑う。カイロの後宮で大佐の面目をつぶした大使への意趣返しである。大佐というイギリス人に対する印象が極めて悪いことを原作者はあからさまに表明した。フランス人の大使だからそう思っているのも当然かもしれない。

大使と聞き手の会話であることを蘆花が省略するのはいつものことだ。弓弦部分はわかりや

すい日本語に翻訳して次のとおり。

【蘆花】其は兎に角気の毒なりしは美人の  
フアチメーなり。余が贈りし珠玉も彼女は  
永く玩ぶを得ざりき。如何になり行きしか、  
不分明なれども、多分縊殺されしならむ。  
此も畢竟彼ワルトン大佐が意地悪くも復讐  
をなしたるならむ。253頁

「弓弦の疑い」という原文をあつかりと「多  
分縊殺されしならむ」と書き換えて誰でも理解  
できる。

【外交報】要之吾心所尤嫌者。為美人法嫡  
梅。予所贈珠玉。彼必不能永宝。結果如何。  
亦不可知。大都不外於縊死。此瓦爾登之惡  
念。以修怨故出此。亦未可料也。93期8丁  
オ

つまり私が心をもっとも痛めたのは美人  
のフアチメーだった。私が贈った珠玉を彼  
女は長く大切にすることができなかった。  
結果はどうなったかは知ることができない  
がたぶん絞め殺されたに違いない。それは  
ワルトンがよこしまな考えで怨みを積み重  
ねてやったことだろうが想像することはで  
きなかった。

この部分について不記の漢訳はほぼ蘆花を直  
訳しているといっている。 罫

【注】

- 1) 陳大康『中国近代小説編年』上海・華東師範大学  
出版社2002.12
- 2) 陳大康『中国近代小説編年史』全6冊 北京・人民  
出版社2014.1
- 3) 左鵬軍 第5章「二、以革命為戲劇的轉型代表—  
—高増『晚清民国伝奇雜劇史稿』広州・広東人民  
出版社2009.6。308-311頁
- 4) 次を参考にした。酒井伝六『スエズ運河』朝日文  
庫1992.1.1

《空谷佳人》翻譯底本考辯

馬 文 偉

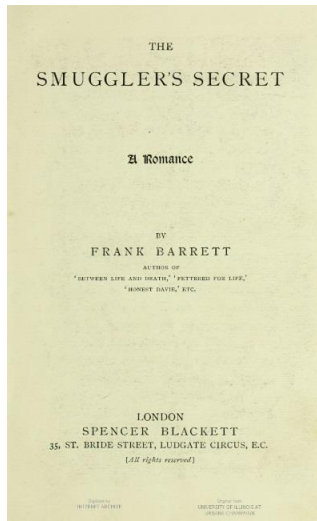
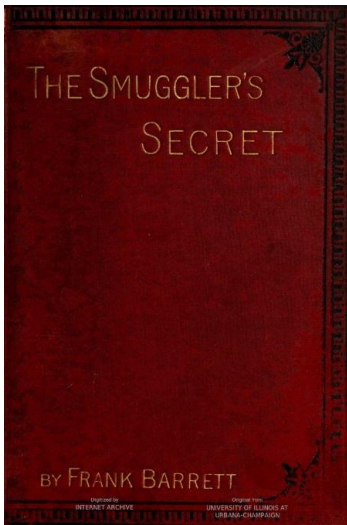
《清末小説から》第117号刊載了古二德  
(César Guardé-Paz) 先生的“《深谷美人》罕  
見林譯與《空谷佳人》譯者考辨”一文，筆者  
在2022年時才偶然讀到，當時就嘗試著考索這  
兩部書的底本，其間嘗試過用種種關鍵詞以及  
大量推測作者的英文名字。包括用回譯（back-  
translation）的方式得出關鍵詞和有明顯特徵  
的句子到各網站進行搜索，比如用“deep/remote  
valley”“New Birmingham station”等等，經過  
幾天努力，仍無功而返。

《深谷美人》的源頭迄今尚未得到線索，估  
計原著並非單行本，而是某雜誌的連載作品。  
一般單行本若發行量較大、篇幅較長並沒有失  
傳的話，還是有可能找到的，而龐大的雜誌中  
的內容，在沒有完全文本化或業經OCR識別，  
是很難搜求的。

至於《空谷佳人》，當看到《清末民初小説  
目錄》第14b版仍標記“博蘭克巴勒は空谷  
BLANK VALLEYを音訳したもの”時，就覺得  
此論述難以成立，理由有四：①稱書籍標題和  
作者同名，實屬脫離常規。恐怕只有自傳體  
小説才有這種可能性吧。即便是同名，也至  
少會標明“自傳”，像 *The Autobiography of Benjamin Franklin* 《富蘭克林自傳》這樣。②再說“博蘭克”的發音尚能接近於Blank。然而“巴勒”的發音

與“Valley”則相去較遠。③退一步說，即便博蘭克巴勒是 *Blank Valley* 的音譯，那麼其核心詞“佳人”依然沒著落。④空谷的空表示 <sup>kōng</sup> 空曠，用 (open, deserted, spacious) 之類的詞來表達才較為貼合，而非空白 blank，故而我們難得遇到它和 valley 的搭配。

儘管如此，我還是嘗試搜索了國外各大圖書館網站，根本就沒有發現 *Blank Valley* 這一書名的小說，覺得僅僅從漢譯書名是行不通的。於是變換思路，從作者著手，《空谷佳人》署名原著者博蘭克，先猜測是 Blanche Bartlett 等等，捧著《人名翻譯大辭典》等大型工具書找尋諧音的譯名去搜，連續搜索了幾天，依舊未果。接下來只好從正文下手，文中開頭提及關鍵詞“案頭”和“手套”，於是用“glove”“table”或“desk”、或“a glove on the table/desk”到域外各網站進行嘗試性搜索，最後終於得到一部題名為 *The Smuggler's Secret: A Romance* (1891)，略作選讀，果然情節與《空谷佳人》相吻合。



作者 Frank Barrett (1848-1926)，是英國的多產小說家（其部分作品見附錄），按當今的譯名統一標準來譯，應作“弗蘭克·巴雷特”，書名直譯應是《走私者的秘密：一段離奇故事》，其主題也並非完全言情。該書名被譯成《空谷佳人》，兩者相去甚遠。清末民初的翻譯小說標題命名往往帶有嘩眾取寵甚至是俗艷的色彩以

招攬讀者大眾，其結果是與原著標題往往是風馬牛不相及。很少有像《隅屋》(*The Corner House*) 那樣忠實而質樸的標題翻譯，大概還是由於當時的主流觀點認為小說主要還是供休閒消遣之用，並沒完全視作純學術的緣故吧。故而在標題中常常是注重“雅”，而非“信”。

另外，原作者 Frank 與“博蘭克”的譯名無法完全匹配，經過分析，竊以為“博蘭克”係“傅蘭克”之訛。設若此說成立，那麼可以推斷造成“博”字訛誤的可能性有三種：①譯者原稿未誤，譯者的手稿本作“傅蘭克”，而為手民所誤認誤排作“博”字。試對比兩者的手寫體：傅/博，傅/博，形近易於致誤。②手稿中“フ”的一豎寫出了頭或潦草所致。③譯者錯將 Frank 看成 Brank 了（這種可能性很小）。事實上，這種形近而誤的現象在商務版說部叢書中也並不算個例，類例就有張治先生提及的“《新飛艇》版權頁的‘尾楷忒星期報社著’，樽本先生《目錄》已經指出‘尾’字乃‘尼’字誤植”。

以下是《空谷佳人》與 *The Smuggler's Secret* 篇首部分的對照（中文版專有名詞[日語稱固有名詞]下劃線為筆者所添加）：

THE SMUGGLER'S SECRET.  
CHAPTER I.

One morning when I went to my customary place in the library I found a glove upon my table. With a thrill of delight I recognised it, and glanced eagerly round, expecting to see Miss Duncan with a book in one of the cosy chairs. My heart fell: there was no one in the room but myself. She must have come in to write a letter and left the glove there by accident. I took it up and put it to my lips. It was soft and cool and sweet, with a delicate scent of spring flowers. I laid it on my palm and looked at it. There was the form of her hand in it; it had the tint of a fair skin. But oh, in colour, texture, form, and sweetness

how poorly it represented the dear hand that had worn it ! It was charming to the senses only because it suggested something infinitely more adorable. With some such rhapsody as this I pressed the glove to my lips again, and then, startled by a sound, I turned and found myself face to face with Miss Duncan, who had come back for her glove. There it was, within an inch of my lips. In the position was embarrassing. What was to be done? Could she take the glove with my kiss upon it, or should she turn her back on me, and leave the room in indignation? She took neither course, but she stood there with a deep blush on her face, and an unspeakable tenderness in the glance that met mine, and then she dropped her eyes, but still she stood there. It was a confession of love that I had not dared to hope for. 'Will you let me keep this glove till I have told your father what has happened?' I asked. 'Yes, Bernard,' she answered, lifting her eyes to mine and speaking quite firmly. I led her to the window that opened on to the lawn, and for a moment before we parted our hands clung together as those cling together which may never meet again.

### 第一章

英倫有卜乃德者。翩翩裘屐少年也。生具冒險性質。剛毅不屈。奮發有爲。而頗摯於用情。倜儻自喜。少孤。怙恃相繼失。而其曾祖父與其祖父。顧老壽。均尚健在。第以賤而行惡。不齒於人。卜夙慕某富翁女。渴欲乞婚。而女父顧薄其貧。意弗之屬。卜亦未敢輕啟齒也。

一日者。卜外出旋歸。至理事室。見案頭遺一手套。異而取視之。則薊澤猶存。且形製絕工。柔膩可愛。意必貴介眷屬所御之

物無疑。第貴女之至卜室者良鮮。舍庚孃外。殆無他人。庚孃蓋即卜所慕者是也。顧庚孃胡爲而惠然肯來。又胡爲而遺其手套。閨人附身之物。理無慢藏或輕以貽人者。疑莫能決。旣而瞥見殘紙半幅。果爲庚孃手書。蓋庚孃適來訪卜不直通值。因留東代面。遂恩恩忘著手套而去也。卜意女之手套旣遺此。少須必將復來。吾當乘機藉手套爲辭。以乞訂婚約。苟不見拒。則此手套即吾兩人之塞脩。而夙願幾可諧矣。無何。聞鈴聲鏗然。卜亟目注門際。則見款關而入者。果即意中人是也。卜乃舉手套加額。復與接吻。以示敬愛。始問女曰。卿得毋爲覓手套來歟。曰。然。曰。僕之於卿。愛慕夙深。因而推及於卿所服御之物。視此手套。拱璧不啻也。卿能即以見惠。以明垂注之厚乎。語雖出口。然私心揣揣思觸女嗔。竊視女面。顧不怒。亦不答。第紅暈雙頰。若不勝情者。卜愴惘不知所云。默然相對者久之。女忽謂卜曰。君果愛之乎。旣愛之。則逕留之可爾。語畢。反身遽出。卜亟追送之。與握手爲禮。更約後晤。晤再三珍重而別。卜自返室。

對比原文，譯者對原文進行了大幅度的改寫，甚至是敘述順序都作了更換。在第一段漢譯中，就添加了對小說男主人公卜乃德（Bernard）的背景介紹，而這個背景介紹是在原書第二段才出現的。文中把Miss Duncan譯作庚孃（把can音譯爲庚），把部分心理描寫改成了對話體。限於篇幅，此處暫不展開作詳細的討論。

原著破解之後，回過頭再來看*Blank Valley*所謂音譯云云，只能算作聯想力豐富的牽強附會罷了，當然也就不攻自破了。 罍

### 附 錄

弗蘭克·巴雷特的部分小說作品一覽（數字係初版年份，部分作品未註明出版年代者暫告闕如）

英語作品：

1. Folly Morrison 1880

- 2. Lieutenant Barnabas 1881
  - 3. A Prodigal's Progress 1882
  - 4. Little Lady Linton 1884
  - 5. His Helpmate 1887
  - 6. The Great Hesper; a novel. 1887
  - 7. A Recoiling Vengeance 1888
  - 8. The Admirable Lady Biddy Fane 1888
  - 9. The Terrors; With Divers Fane 1888
  - 10. The Smuggler's Secret : a romance 1890
  - 11. The Sin of Olga Zassoulich, a novel 1891
  - 12. Olga's Crime 1891
  - 13. Found Guilty 1892
  - 14. Out of the Jaws of Death 1892
  - 15. A Set of Rogues 1895
  - 16. The Harding Scandal 1896
  - 17. Breaking the Shackles 1900
  - 18. Fettered for Life
  - 19. Love and Honor
  - 20. Between Life and Death
  - 21. Honest Davie
- 西班牙語作品:
- 1. Su Cara Mitad 1889
  - 2. El Gran Lucero 1892

- 中国偵探小説興起の社会背景及多重意義『文学評論』2022年第4期 2022.7 電字版
- Wen Yang & Wenjuan He○An Analysis of the Characteristics of Pseudo Detective Translation in Late Qing Dynasty—With Zhang Kunde's Translation as Example“Asian Culture and History”vol.14,no.2. 2022.8)。電字版
- 神田一三著、李楊訳○包天笑漢訳《新造人術》——原著及其底本『科幻研究通説』第3巻第4期 2023.12
- 黄曼編著○『民初小説編年史(1915-1916)』武昌・武漢大学出版社2023.6
- 戦 玉冰○『民国偵探小説史論(1912-1949)』上下冊北京・中国社会科学出版社2023.7
- 李 国平○晚清小説名著《廿載繁華夢》版本新考『明清小説研究』2023年第4期(総第150期) 2023.10.15
- 陳玉蘭、王子珍○晚清滬報附刊《老饕贅語》《蛛隱瑣言》辨偽『明清小説研究』2023年第4期(総第150期) 2023.10.15

清末小説から

- 姚 翠翠○曾氏第二位外交官曾広銓『内蒙古農業大学学报(社会科学版)』2010年第4期(第12巻総第52期)
- 潘 紅○跨越疆界の求索:《時務報》和哈葛德小説 She『外国文学研究』2015年第1期
- 潘 紅○言説与沈黙之間:曾広銓訳《長生術》の増刪及其話語意義『語言与翻譯(漢文版)』2016年第2期
- 盧 付林○《福爾摩斯探案全集》:張坤徳の翻譯策略与中国偵探小説の発生『南華大学学报(社会科学版)』19巻1期 2018.2。電字版
- 周 潔○中国近現代司法変革の文学反映——略論



次号の公開は2024年7月1日を予定しています